目黒星美学園

物語

―みむねのままに

Storia
della Scuola
di
Meguro Seibi
Gakuen

目黒星美学園物語編集委員会

目黒星美学園物語

みむねのままに

Storia
della Scuola
di
Meguro Seibi
Gakuen

目黒星美学園物語編集委員会

一卒寿を祝して

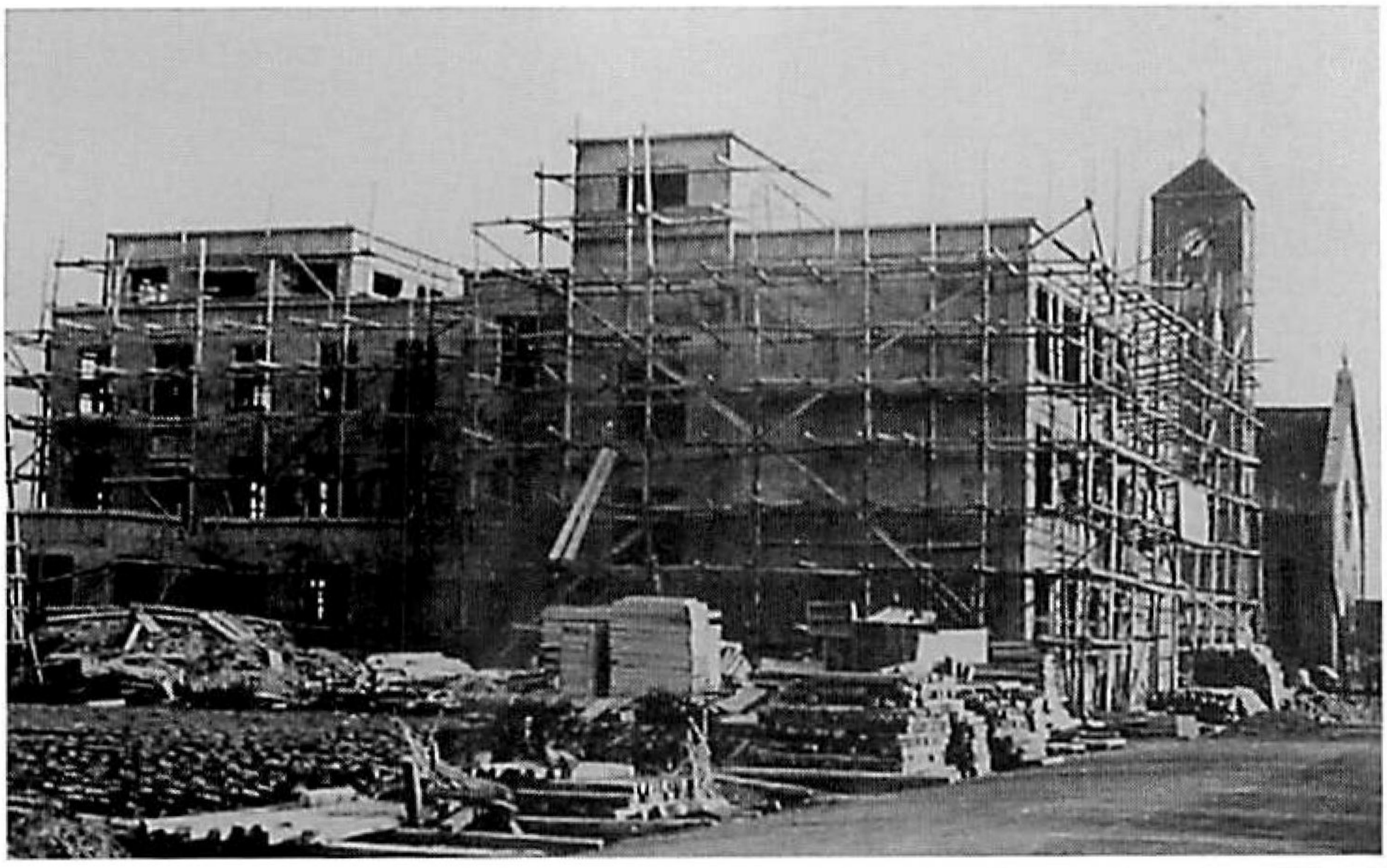
シスター・アンジョリーナ・バローネに捧ぐー



創立時より小中高の校長として18年間お働きになったシスター・アンジョリーナ



第1回小学校入学式。児童126人、父母、先生。幼稚園の先生方も参加して



建築中の小学校校舎。購入できた土地分だけの建築。２年目から使用



4名の最初のシスター方。左から、Sr. バルバラ、Sr. アンジョリーナ、Sr. ジョゼッピーナ、Sr. テレジーナ、三谷町の家の前で



オペレッタ『マルコ漁師』を上演したり日比谷野外音楽堂に出演したりした男子児童



いつも温かく星美を見守ってくださったダルフィオル神父様

正門より臨む中学高校校舎。高校開設を感謝して建てたマリア像が屋上に



中高校庭のルルド。生徒が新聞紙を持ち寄って、マリア像等を購入した



開校当時の中高校舎とスクールバス（右）。校庭は畑のまま

目黒星美学園物語

みむねのままに

はじめに　五期〇麻生マユ——4
序にかえて　シスター・アンジョリーナ・バローネとの二人三脚
シスター・テレジーナ笹田淳子——6
第1章　目黒星美学園はどのようにしてつくられたのか——37
インタビュー
シスター・アンジョリーナ・バローネ／ダルフィオル神父様／
シスター・ジョゼッピーナ／鈴木和子先生
第2章　先生方の記憶——143

第3章 生徒たちの証言 —— 179
第4章 父母たちの思い出 —— 227
目黒星美学園設立当時のエピソード —— 232
あとがきにかえて
目黒星美学園小学校校長　大森 隆宣 —— 238
目黒星美学園中学・高等学校校長　シスター牧田トミ —— 242
シスター・アンジョリーナ・バローネ略歴 —— 248
年表 —— 254
編集を終えて —— 266
特別寄稿　創者ドン・チマッティと目黒星美学園　作田忠司 —— 270

はじめに

「愛は親切で、忍耐強い。すべてを包み、すべてを希望し、いかなる苦労をも耐え忍ぶ」――聖パウロ

目黒星美学園物語編集委員会代表　五期〇麻生マユ

慈愛に満ちた眼差しと明るい笑顔で、私たちをしっかり見守り、育ててくださったシスター・アンジョリーナ・バローネ校長様の思い出は尽きることがありません。シスター・アンジョリーナは、一九三九年に来日されて以来、戦中戦後の日本の社会の中で苦労を重ねながら、深い信仰と信念を基に、子どもたちを愛情いっぱいに育ててくださり、目黒星美学園の基礎を築いてこられました。そして二〇〇四年、九〇歳のお誕生日を迎えられました。残念ながら今は病床に臥しておられますが、私たち卒業生は感謝の気持ちをこめて、お祝いの記念としてこの本を作りお贈りしたいと思います。

戦後まもなく、東京都目黒区碑文谷の地に、司祭館が建設され、着任されたダルフィオル神父様によってはじめられたオラトリオ（日曜学校）が幼稚園に展開し、サレジオ教会の建設と同時期にご父兄のご希望で小学校が作られることになりました。その初代校長様がシスター・バローネでした。その建設には大変なご苦労がありましたが、サレジオ会創設者ドン・ボスコの教育法を見事に具現されたのは、実質的に堅実にそれを支えられたシスタ

ー・テレジー笹田共々のご努力によるものでした。

シスター方、諸先生、ご父兄、生徒、皆が一緒になって築き上げてきたという草創の頃の記録は、当事者一則生がテープに残しておりました。それらを文字にして、この本に収録することができました。

あたたかくへのインタビューという形で、ナ・バローネ、インターナショナルな学園での生活と、おやさしいシスター・アンジョリーが集まりました。たくさんの原稿の思い出は、いつまでも私たち一人ひとりの心の中にあります。

今日、日本における子どもたち、若者たちを取り巻く環境の変化は混迷をきたしています。ただあの頃を懐かしむだけでなく、そこに今日の混迷から脱却できる何かがあるのではないかと、考えてみたら良いのではないでしょうか。

ドン・ボスコ教育の実践は、前述の聖パウロのことばに基づいています。日黒星美学園で学んだことは私たちにとってとても大きな意味をもっています。卒業生の有志が集まってこの本を作りあげたことにもそのことがうかがえると思います。

奇しくも二〇〇四年は、サレジアン・シスターズ来日七五周年、目黒星美学園小学校ができて五〇年、ラウラ・ビクーニヤ帰天百周年、ドメニコ・サビオ列聖五〇年と記念すべきことが重なる年であります。偶然にもこのような年にこの本を作ることができて大変嬉しく思っています。

シスター・アンジョリーナ・バローネとの二人三脚

目黒星美学園の芽生えから苗木になるまでの歩み

シスター・テレジーナ 笹田淳子

卒園生の方から、

「初代校長シスター・アンジョリーナ・バローネが九〇歳になられるので、その思い出を文集にしてお祝いしたいから、原稿を……」といわれ、

喜んでお受けしたが、書き始めると、

シスター・アンジョリーナ・バローネの思い出は、即、目黒星美学園の歴史になることに気付き、

もう時効になっていることも合わせて、二人三脚ですごした創設期の歩みを記し、

シスター・アンジョリーナ・バローネの思い出の記とした。

出会い

シスター・アンジョリーナ・バローネは私が扶助者聖母会に入会した時、最初に出会ったサレジアン・シスターズである。

その時、一九四七年（昭和二二年）一月二七日、入会に際しまず東京都内にあった叔父の家に行き、そこで二、三日過ごし、三一日のドン・ボスコの祝日に入会するつもりで、前の晩の急行で金沢を出発した。冬の最中のこと、列車が、まだ明け切らないなかに降りてそのまま修道院に入りたくなった。そう思うといてもたってもいられず、思い切って下車し、あの師団坂を登り修道院に向かったのだった。

幸い、門はもう開いていたが、急に、しかもこんな時間に来てしまい、どこへ行ったらいいのかとちょっと迷っていた時、一人の若いふっくらとした方（志願者）が近付いて下さった。こうやって飛び入りの修道院生活の幕が開けられたのだった。

ごミサ後、応接室にいると、ノックと共ににこやかな笑顔で入ってこられ、「良く、いらっしゃいました。一緒に聖人になりましょうね」と、あたたかく迎えてくださったのがシスター・アンジョリーナ・バローネであった。この最初の出会いから、シスター・アンジョリーナ・バローネは校庭で、廊下でと折に触れて優しい言葉をかけてくださり何かと力づけ励まし

て、修道生活の第一歩を同伴してくださったのだった。

新任地

昭和二九年三月の終わりころ、ジープに、家財道具一切を乗せて赤羽を後に、新任地目黒に出発しようとした時、見送りに出られた着任直後の院長シスター・M・ピエトロベリがふと気付いてシスター・アンジョリーナ・バローネに「お金を持っていますか」と尋ねられ、一銭も持っていないと返事に驚いて、急いで取りに行かれ、一万円を持ってきてくださった。

この金額は当時としては相当の価値を持ってはいたが、新しい支部の創設のためには心もとない金額であったし、もし、シスター・M・ピエトロベリが、気がつかれなかったら!?（おことは、まして新しい支部を開設しに行くことは考えられないことである）と、半ばあきれ顔の私に、シスター・アンジョリーナ・バローネは「神様は何でもはからってくださいます」といわれ、み摂理に心から感謝された。その深い信頼に私は驚いたのだった。こうして始まった日黒での生活のすべては、聖マリア・マザレロがモルネーゼで会を始めたころの貧しさもこの様なものであったかと思わせるものであったが、シスター・アンジョリーナ・バローネはひときわ輝く信仰の精神で、まだ、校舎も、土地も何もない時に、ともすると沈みがちな我々を

「勇気を出して、もうすぐ校舎ができますよ、修道院もね」と、明るく励まし、どんな出来事も神のみ手から受け取り、その生き生きとしたというよりも、すさまじいまでの信仰で我々の先頭に立ってくださった。

また、サレジオ幼稚園の二階の三教室でスタートした学校で、施設設備の不備（皆無）を補うかのように子どもたちを愛し、学園の母として春の太陽のような温かい微笑みですべてを包み込み、子どもたちも、校長様！　校長様！　と叫びながら駆け寄り、頭を撫でていただいたり、グレンビューレ（前掛け）の下を隠れ家として使ったりしたものだった。設備のない、未来像も不確かな学校、しかし、そこはまぎれもない『家』であった。ドン・ボスコの望まれる『家』をシスター・アンジョリーナ・バローネは全身全霊で造ろうとされたのだった。

船出

今までサレジオ会の神父様方がしてくださっていた校地の購入という、考えたこともない仕事にも着手し、時には夜の十時過ぎまで地主さんの家で交渉を続けたこともあった（当時は夜、しかもこんな時間帯に院外にいることは考えられない事であった）。

売買価格、あるいは交換条件として出される代え地の折衝、また、地目変更に関して農地委

員会の意図的とも取れるルーズな対応等、多くの困難を一つひとつクリアして、一九五四年（昭和二九年）九月、計画の半分ではあったが土井東京大司教様によって定礎式の行われた校舎は、翌一九五五年（昭和三〇年）の三月に、ちょうど来日中だったサレジオ会総会長ドン・レナト・ジョッティ師の手で祝福された。

自分たちの校舎ができ、名実共に星美学園小学校の第一歩を踏み出すと、シスター・アンジョリーナ・バローネは学習面の充実はもちろんのこと情操面の教育にも力をいれられ、東横百貨店（今の東急）でレリーフ展を開催したり、L・ダルフィオル神父様のご指導でオペレッタ『マルコ漁師』、そしてシスター・アンジョリーナ・バローネ指導の英語劇『赤頭巾ちゃん』を、やはり東横百貨店の大ホールで教皇庁大使、アメリカ大使らのご出席を得て開催し大ホール満席の観客に大きな感銘を与えた。当時ＮＨＫ等のマスコミにも大きく取り上げられた。あるいは、恐らく、日本での父親の学校参観の皮切りであった、父親を対象にして講話と授業参観（お父様学校とよんだ）を計画したりと、次々にアイデアを出して、多くの犠牲をいとわず真心から協力して下さる先生方はもちろん、保護者の方々をも巻き込んで、教育使命を一緒に果たすよう励まれたのだった。

しかし、この教育使命の遂行が挫折するようなことが起こった。

第二期工事を計画し、提出した建築確認申請が「都の補助道路計画が校庭を北東から南西に

斜断し、第二期工事の建築がその計画路線上にある」との理由で却下されたのだった。その路線計画上にはサレジオ会の碑文谷教会もあり、また、一期工事の時に全体の計画図も添えて提出していたのに何も指摘されなかったので、まさに晴天の霹靂（へきれき）の出来事であった。区役所では解決しそうもないので、直接、都庁に行くことにしたが、都の建築局に行けば「建設局で道路計画を解決してもらうことが先決……」といわれ、建設局に行くと「いや、建築の問題だからまず建築局で許可を……」といわれ、（当時両局は有楽町と、大手町にあり、非常に離れていた）雨の日も、かんかん照りの日も両局の間をテクテクと都庁日参をして同じような返事を聞いているうちに一年近くの月日が流れた。

この間、当時の最高裁長官T氏夫人に紹介状をいただき、F副知事に直接嘆願もしたが計画の変更はできなかった。

ところが、あまり何度も何度も都庁に通う我々に日を止め、声をかけて下さったK水道局長が話を聞かれ同情され、Y建設局長の所にご一緒してくださることになった。が、「私はフェミニストですがこれはどうしようもありません」とにべもない返事がかえり、さすがにお祈りをお願いしたり、子どもたちに「大きなお恵みがいりますからお祈りをしてね」と願ったりした。が、この頃はシスター・アンジョリーナ・バローネは毎晩、遅くまでご聖櫃の側近くで祈り、恵みを願い、力をくみ取っておられた。

窮余の解決策として路線計画にかからない一教室分の床面積で、三階建にして三教室を増設し急場をしのいだのだった。

ある時、霊感（それは文字通り霊感であった）のように頭にひらめいた、イタリア大使に窮状を訴え、善処方を依頼する都知事宛の公文書をお願いしたら……というアイデアをもって、アポイントメントもなしに大使館に出かけた。心よくお会い下さった大使に、システター・アンジョリーナ・バローネは必死に今までの経過を話し、都知事への依頼書を……と願われた。大使は早速依頼書を整えて下さった（大使にとっては非常にご迷惑のことであったろうと、今でも申し訳なく思っている）。

これを持って知事室を訪れたのは、物凄い雨のご昇天の祝日であった。依頼書に眼を通し、我々の話を聞かれたY知事はしばらく考え込まれたが、「わかりました。何とかしましょう。しかし少し時間がかかります。三か月程お待ち下さい」とお返事をくださり、喜びのあまり飛び上がりたい衝動を辛うじて押さえ、お礼を申し上げ退室しようとした時、ふと見ると今まで かけていた知事室の立派なソファーに大きなシミが二つ！　我々の修道服が大雨でビショ濡れだったのだ……。恥ずかしさと恐縮とで真っ赤になってお詫びする二人を都知事は優しい微笑みを浮かべ〝大丈夫〟というように頷かれた。

廊下に出た二人は思わず抱き合って、押さえに押さえていた感情を爆発させたものだった。

こうして足掛け三年に及んだ補助路線は知事のお言葉より遅れはしたが、当初計画より少し東に移動されて第三次工事が着手され、シスター・アンジョリーナ・バローネが感謝のしるしに……とイタリアに発注した扶助者聖マリアのご像も到着し、五月には完成した校舎の正面に安置され子どもたちを見守って下さることになった。

よき理解者

この間、三期生が入学した時、保護者のお一人、温厚なお人柄のU氏との出会いがあった。シスター・アンジョリーナ・バローネは入試の父兄面接でU氏とお話をしているうちに、「この方に助けていただいたら!?……」との思いが心を横切り、改めてお出でを願うことにした。U氏に我々の夢物語にも似た計画をお話しし、ご父兄としての援助だけでなく、企業マンとしてのセンスからのアドバイスをいただきたいとお願いをした。資金なしに、広大な計画を熱っぽく語るシスター・アンジョリーナ・バローネの話を聞かれたU氏は「何と非常識な！」とあきれたようにつぶやかれた。なにしろ何の資金の目途もなく、あるのはただ聖母への限りない信頼と教育への情熱だけであったから……（ずっとあとで氏は「シスター方の非常識は最高の武器ですね」といわれたものだった）。

「わかりました。できるだけ、お手伝い致しましょう」とおっしゃり、それから一九七一年（昭和四六年）五月、天に召される時まで、学園のことのほかには仕事がおありにならないかのように全力で関わって下さり、喜びも、悲しみも共にし経営面でアドバイスして下さった（『お母様方の会』を『母の会』や『PTA』ではなく『奉仕委員会』と名付けられたのも氏のアイデアであった）。

中・高建設へ向けて

さて、校舎ができると、ひと息付く暇もなく、次の仕事、すなわち、中・高の校地入手を始めなければならなかった。というのは「今は、お祖母ちゃまがいらっしゃるから駄目ですが、中・高のために必要な時はお売りしますよ」と言われたT地主の言葉を真にうけていた我々は、小学校校地の北側を入手しようと交渉を開始した。ところが、交渉はおろかお会いすることもなかなかできず、やっとお会いしても出される金額は、想像を絶する高額であったり、最終的には、お金はいりませんから、代替地を考えてくださいといわれ、代替地探しを始め、何カ所か探して見ていただいたが、地形とか広さとか所在地とかどこか不満な所があり事態はなかなか進展しなかった。

時間の制限や後援会の方々のご意見もあり、小学校裏の土地の購入はあきらめ、新たな校地を探し始めることにした。

と、言葉にすることは簡単だが、当時の生徒（児童）が通学できる距離にあること、そして、都の種々の計画がないこと。境に適していること、法規上必要な広さがあること、教育環等々の諸条件を満たす土地を探すことは、簡単なことではなかった。

それでも、I氏や、S氏等が何か所かの土地を探してくださり、そのたびに自分たちで都の計画の有無を確かめた。「これは」と思うような土地には、申し合わせたように、都の公園計画や道路計画があっていつも肩をおとして帰るのが常だった。

ってを得て、K元大蔵大臣の所に行き駒場の国有地の斡旋方をお願いしたのもこの頃だった。

こうした時、I氏が上野毛の河川敷近くの土地を探して下さり都市計画もないこともわかり、喜びながらK局長に報告すると、K局長は、「ご一緒に現場を見に行きましょう」とおっしゃり、驚く私たちとご一緒してくださった。「田圃だから埋土をしなければならないので、他に候補地がないのですから購入なさったら……」と言われ、いろいろと分高くなりますが、相談した末、数人が所有されていたので、真ん中あたりの地主さんと売買仮契約を結び内金を払い、やれやれと一息つくことができた。

しかし、その後I氏が顔色を変えて来られ「大変なことになりました。上野毛のあの土地を

T社がわれわれの二倍近くの価格で購入することを提案し、地主たちはそれを受け入れ、売買契約が成立しそうで、地主が内金を返しに来ました」と言って内金の小切手を机上に置かれたのはその直後であった。この時のショックは大きく、さすがのシスター・アンジョリーナ・バローネも「中・高を造るのは神様のみ旨ではないのかしら!?」と口にされたが、すぐ、「み旨のままに」と祈られたのだった。

（しかし、この大きな苦しみは後で考えると神様の妙えなるみ摂理であった。と、いうのは、この土地は広くはあったが、五千坪を切っており、もし、購入していたら、中学校は設置できても、高校の設置基準の適用は想像以上に厳しいものであった）を満たさず、高校の認可は下りず、三年後の校地探しは更に困難であったろうし、たとえ校地が見つかったとしても新たな土地購入、校舎建設は資金的にも一〇〇％近く不可能であっただろうと考えると本当に有難いみ摂理の計らいであった）。

局長室での思いがけない出来事

このような状況の中でもI氏は、土地探しを続け、千歳船橋に土地を見つけてくださった。

広々とした土地と素晴らしい環境に満足し、例によって都市計画の有無を調べに行った。その時、たまたま通りかかられたY局長が、「時々見えていとおり一辺のご挨拶をした我々に、

るようですが何事ですか？」と話しかけられ、局長室に招き入れられた。

前の補助路線計画の時のことを思い出し、少し堅くなっていたが、打って変わったように、「道路計画の時は都知事の所まで行かれたのですね。驚きましたよ」と、優しく話を切り出されたのに、安心し、今までのことをお話ししているうちに、感情を制し切れなくなり「もう、私どもの努力と、力の限界を越えました。局長さんのお力でどうぞ、都の所有地でもお世話下さいませ」と思わず激しい口調でいうと、「お気の毒に、この前の道路のことといい、今回のよろしいなんとか致しましょう。」といわれ、校地探しといい本当に苦労なさいますね。よ「？？？」と顔を見合わす二人の前で、電話器に手をのべ、「O社のIさんにつないで下さい」「あ、もしもしIさん？　建設局のYです。今、ここに二人の女性の方、目黒星美といって創立間もない学園ですが、地味に、しかし非常に熱心に教育をしている、ミッションスクールの方が校地探しのために見えています。お宅の土地で適当な物があれば、もしなければ、お宅の力で、宜しく面倒見て下さいませんかお願いします。とても困っておられるのです。そして、相手がミッションスクールですし、良い方々ですから、できるだけ安く、支払い期限も長くして助けてあげて下さい。ひとつ、宜しくお願いします。お願いしますよ！」と、受話器を置かれ、力強く「大丈夫ですよ。もう少しお待ち下さい。そして立派な教育を続けてください」と励ましてくださった。

〝狐につままれる〟という表現がぴったりの、何が何だかわからない気持ちで顔を見合わせ、辛うじてお礼を申し上げ、局長室を辞し帰院したが、「喜びが実感となるには大部時間が必要だったし、最後の最後まで幾分かの疑問符が消えることはなかった」のは私で、シスター・アンジョリーナ・バローネは「マリア様は何てご親切なのでしょう。Ｇｒａｚｉｅ　Ｍａｄｒｅ　お母様〟（聖母マリア）」と繰り返し感謝しておられた。

Ｏ社から電話が入り、あれよあれよと思う間に、話が文字通りとんとん拍子に進み、委員会の方々と何回か現地に足を運び、修道会の長上とも相談した結果、契約にまでこぎつけ入手したのが現在の中・高所在地、大蔵の土地である。

血の汗を流したともいえるような苦労をさせられた、あの都の道路計画の変更。しかし、あの道路計画がなかったら、都庁にも行かなかったであろうし、Ｙ局長とも知り合うことはなかったであろう。と、考える時、み摂理のみ業にただただ頭を下げるのみであったでした。（後日談ではあるが、中・高の校舎が完成し落成式をしたとき、Ｙ局長をお招きしていたが公務のため欠席とのお返事であった。しかし、五月の聖母祭の行事を終え、校長室で、二人で一息入れている時、何の予告もなしにＹ局長が訪ねてこられ、「おめでとう！　よくよくここまで頑張りましたね。本当に大変でしたね。偉かったですね。落成式には、出席できませんでしたがどうしても、直接おめでとうを言いたくて来ましたよ！」と、おっしゃってくださった。

あのY局長が……と思わず涙が出てきたのものだった。

できないので、ミサ用のブドウ酒をさしあげると、とても喜んでくださり、「いろいろな困難の中、よく頑張りましたね、本当におめでとう」となんども、なんどもお祝いとねぎらいの言葉をくださり、三〇分程お話をしてお帰りになったが、本当に感動の訪問であった)。

それからの日々は中学校設置許可申請書の準備とK技師や委員会の方々と一緒に設計図作成、資金の調達、建築会社の選定などが猛スピードで行われた。なにしろ開校まで半年しかないのだから……。こうして一一月二一日には西側三教室三階建ての第一期工事が始まり目黒星美学園中学校が動きだした。

ようやく入れるようになった校舎で四月八日に第一回中学校入学式が挙行され、シスター・アンジョリーナ・バローネが任命され、職員五名、生徒数八五名の何の施設も設備もない学校が誕生した。

開校を祝う

校舎の足場は取れていたが、使用できるのは一階の二教室と集会室、職員室、薄いベニヤ板で仕切り二部屋としていた)の三部屋で、教材、教具はゼロ。あるの

は黒板、生徒用の机、椅子と仮の職員用の長机と椅子、湯沸かし室も使用できず、全員水筒持参の時もあった。でもそこには開拓精神と教育愛に燃える先生方と善意と創造性豊かな生徒たちがいた。

また、開校までに解決すべき問題として生徒たちの足の確保があった。校地・大蔵の最寄りの交通機関小田急は、目黒区碑文谷近辺に住む生徒たちのために不便というより、用をなさず、唯一の交通機関として、目黒～砧公園間の路線バスの新設を東急に申請をしたが、部外者にはわからないバス会社間の権利問題があり、簡単なことではなかった。

やっと、京浜急行の観光バスの中から路線用に転用する前の調子のよいバスをお世話いただき内外ともに改装して開校時にかろうじてスクール・バスとして間に合わせることができた。しかし、二期生を迎えるようになるといくら大型のスクール・バスでも一台には乗り切れず、小中学校の間を二往復し、学年によって一校時分ずらしての時差登校を余儀なくされた。改めて東急に、目黒～桜新町の路線を砧公園まで延長し、朝と夕方の通学時を重点的に（といっても三〇分に一本程度）運行して下さるようにお願いに行った。

ここでもみ摂理は働いて東急バスの運行部長は生徒のご父兄であり、複雑なバス運行の通知をいただくことができた。

寄せ、調べておられたが、係の方に何とか、バスを運行する方向で検討するようにとお命じになり、想像していたより早く、バス運行表を取り

校舎の一部は使用できたというものの、まだコンクリートが完全に乾燥していないなかったので、生徒たちの健康を考え、遊び時間や昼食はできるだけ校庭でするようにしていたが、いま考えても、どのようにして、授業をし学校生活ができたのか不思議でならない。

六月一七日開校式が行われた。三階のアコーデオンドアで間仕切りできる教室を会場として、イタリア大使、東京都私学課長、世田谷区長、修道会関係の方、地元の方に学校を披露して、開校を祝った。

また、この日を期に、今までスクール・バスで小学校から通っていたシスターたちも、こちらで一支部を設置して新しい共同体の生活が始まった。が、ここでの生活も清貧を文字通り生きており、毎日の食べ物にも事欠くこともあった。

シスター・M・松崎八重は修道院内の仕事を一手に引き受けたうえに、畑を作り、生徒のためにとても美味しいパンを作ったりもした（このパンは大変好評で、〝シスターマリアのパン〟といわれ懐かしがられている）。

にわか仕立ての運動場は、残土の山、飯場跡、さらには畑までが同居して、運動場というにはほど遠いものだったが、探究心旺盛な生徒たちには格好の遊び場となり大々的な探検遊びが始まった。雀の雛や蛙を遊び友だちにし、背丈まで伸びた草や廃材を利用し小屋を作り、畑に取り残されたジャガ芋を見つけては掘る。次々に考え出される遊びの数々にハラハラ、ドキド

キさせられながらも、無邪気な生徒たちに巻き込まれ、空き缶を利用して缶でたジャガ芋を教師も学校長も大騒ぎでほおばった。学校生活というよりむしろ林間学校のような時期であった。

日銀総裁への直訴

一九六一年（昭和三六年）度に入ると、第二期工事実施に動き出した。

例によって資金！　この時もまだ、経済情勢は厳しく、日銀の引き締め政策は続いていた。

学園の取引銀行であるS銀行都立大支店に何回か足を運んだが、支店長さんから、「ご融資いたしたいのですが、日銀からの融資枠が決まっていますので……、日銀にいらっしゃってお宅のために別枠を引き受けて下さればご融資致します」といわれ、NY銀行の頭取のK氏をちょっとだけ、本当にちょっとだけ存じ上げているのを思い出し、K氏を通して日銀総裁への紹介状を厚かましくお願いした。K氏はご親切に紹介状だけでなく、アポイントメントまでお世話くださった。

その日、受付で、「総裁にお目にかかりたいのですが」というと、係の方は「日銀総裁に面会を求める人が徒歩で来る？」と思われたのだろうか、不審な表情で二人を眺め、「総裁ですか？」と念を押されたので、K氏の紹介状をお見せし、アポイントメント

もあることを話すと、驚いたように連絡を取り、今度は、いとも丁寧にエレベーターまでご一緒してくださった。エレベータを降りると、今度は女性の秘書の方が待っておられ、濃いエンジの毛足の長いふわふわの絨毯が敷き詰められている廊下を進み奥まった部屋に案内してくださった。椅子を勧めながら「少々お待ち下さいませ」といわれたが、あまりの立派さに、身の置き場がなくもじもじとして待っていると、「お待たせ申しました。どうぞこちらへ」と導かれたのは副総裁室であった。

副総裁は「申し訳ございませんが、総裁は急に重要会議が入りましたので、重要件を承りますように、と申しましたので」といわれ、恐縮する二人に椅子を勧め、話を促された。

重厚な調度品がかもしだす雰囲気に、緊張し固くなった我々が「学園のためにS銀行にもうけていただきたい……」と一生懸命に話すのを聞かれ、しばらくして「お話は良くわかりました。どうぞ、S銀行の支店長に、天下のS銀行が自分の枠内でご融資ができないとは、何事！　と、お伝え下さい。大丈夫。もう融資を受けたような安堵感に包まれて、聖母のおはからいを味わい感謝の祈りを捧げながら帰途についたのだった。

翌日、S銀行都立大支店に行き支店長さんに副総裁のお言葉を伝えると、「えっ、本当に日銀副総裁にお会いになったのですか？」と驚かれ、「日銀総裁にお会いするようにとおっしゃったのは支店長さんでございませんか？」と言う我々に「わかりました。考えます」と答えられたのだった。

次の委員会にことの次第を報告すると、「凄い、日銀副総裁にお会いになるとはたいしたものですな！」「偉いことをなさいましたな！」等々、口々に言われ、改めて当日の緊張を思い起こし、また日銀総裁の社会的地位を認識したのだった。

その時、K銀行（当時）世田谷支店長のA氏が「今まで、黙っていましたが、よろしかったら、うちでご融資致しましょうか？」と発言され、「時節がらご迷惑でございませんか？」と聞き返すと「今後、校納金等をお世話させてくだされば、支店長決済でご融資致しましょう」とのことで委員の皆様の大きな拍手のうちに融資問題は解決したのだった。

最後の問題は本部からの許可がなかなかおりないことだった。

われわれとしては、東側の残り全部を一度に建てたかったが、本部から来た許可書は半地下と一階のみであった。この時シスター・アンジョリーナ・バローネの口からは一言の不満も、恨みがましい言葉もでず、『み旨のままに』とだけ言われ、委員会の方々が目上に対して悪感情を持たないようにと一生懸命に配慮され、その信仰、従順に頭の下がる思いがしたものだった。

こうして第二期工事は一九六三年（昭和三八年）六月一日にでき上がった。

高校新設への新たな障害

この間、高校の新設許可申請の仕事があった。

一応、書類を整えて、都庁に行ったが、パラパラと、書類をめくっておられた係の方が、「先生、これでは許可できませんよ。」と言われ、「えっ？」と驚く我々に、校地が狭いですよ、高校は一人当たり、〇〇平方メートルの校地が必要です」と、あっさり言われ、あまりのことに「都立高校もそれだけの校地を持っていらっしゃいます？」と皮肉を込めた言葉を出しながらも、貧血しそうになっている我々を眺めておられたが、急に「先生、これは登記上の坪数でしょう？。実測しましたか？　実測と登記上の坪数は違うことがありますよ。実測。実測をしてごらんなさい」と実測に力を込めて言われた。「わかりました。すぐ、実測していただきます」と答え、帰るとすぐ、測量士に来ていただいた。一週間位たって、測量図が届けられたがその面積はわずかではあったが、高校設置に必要な面積を超えていた。

ナゾのような言葉の結果をかみしめながら都庁に行くと、「先生、よかったですね！」と自分のことのように喜びながら、再度書類を点検し「これで結構です。ご苦労様でした」と言わ

れた時には、認可を受けたような安心感と、一種の虚脱感とが心身を駆け巡ったのだった。

一九六二年（昭和三七年）、一〇月二日に認可書を手にし、お聖堂の聖母のご像の足元にお捧げし、感謝の祈りを捧げた。

一九六三年（昭和三八年）四月八日　日黒星美学園高等学校の第一回入学式。九一名の生徒で内輪だけではあるが、しかし心をこめた式を行い、学園は少しずつだが前進した。

次の目標は校舎の完成である。当時は戦後第一次ベビーブームの子どもたちが中三、高一になっており、東京都としても高校設置は緊急課題であり、公立高校を増設すると共に、私学の高校設置を推進し、多額（標準的な校舎ではあるが、建築費の三分の一）の補助金を出していた。

我々も是非この補助金を受けたくて本部に建築許可を申請したが、なかなか許可は出ず、しかも補助金申請の提出しめきりは迫っており、「み旨ならば、許可がおりますように！　どうぞ、み旨をお示し下さい」と真剣に祈った。このシスター・アンジョリーナ・バローネの口からは、一言の嘆きも聞かれなかった。そして一方では、補助金申請の書類の準備もしていた（書類提出まで一か月位しか時間がなかったので……）。

（この間、八月一五日に山中湖畔にある修道院のルルド前で、〝希望のないところに、なお希望を持って〟祈っていたアンジョリーナ校長は突然『母親が自分の子どもを忘れることがあるでしょうか。私は、私の子どもを見捨てることはけっしてありません。安心しなさい』と言う声をはっきりと聞き、心に残っていた不安、心配

が瞬時に消え、安心、平和が、心をみたし、許可はおりる、という一コマもあった）。

焦燥にも近い日々が過ぎたが、全く突然に九月五日に管区長から増築の許可が下りたとの連絡が入り、マリア様！　とお聖堂に駆け込み感謝の祈りを捧げたのだった。補助金申請も滑り込みセーフで提出することができ、九月二三日には委員会の方々の喜びの拍手のうちに、第三期工事の契約ができ、念願の工事が始まった。また、一二月初めには都庁から補助金交付決定の通知が届いた。

新校舎屋上にはいただいた数々のお恵みの感謝のしるしと、ここに集う生徒たちと地域の方々をお守り下さるようにとの祈りを込めて、高さ三メートル、台座も三メートルの無原罪の聖母像を安置することにした。台座正面には『いと潔き御母』と、裏面には『ご保護を願って』との思い入れの文字を刻んだ大理石の板がはめ込まれた。

四月一九日からはライト・アップもされ、夜空にくっきりと純白のお姿を浮かべ、朝に、夕に生徒たちを見守り、保護の手を差しのべて下さると共に、地域の方々、特にお隣の大蔵病院に入院しているお恵みや、慰めにつ多くの方がいただいたお恵みの感謝にと高額の寄付を持ってこられいてお礼に見えた方が、いただいたお

たこともあった。

一九六四年（昭和三九年）の一月には、工事完成も近付いたので、落成式のことを煮つめ、シスター・アンジョリーナ・バローネの「目黒星美（小学校）の最初の定礎式は土井枢機卿様によって行われたのだから、中・高校舎完成の祝別は是非、土井枢機卿様にお願いにうかがった所、気持ちよくお引き受けくださった。

こうして、五月一四日に引き渡しを受けたばかりの校舎を、同卿によってイタリア大使（代理）、区長、東京都私学課長、関係官庁、多くの聖職者、両管区長、修道会関係者、そして、この日まで、学校と一心同体となって、共に喜び、共に苦しみ、すべてを分かち合って下さった委員会や保護者の方々の見守る中で荘厳に祝福していただいた。

式は、感謝の宴へと移った。都知事は丁重な祝電をくださり、関係官庁での異例な取り計らいをしてくださった方々、社会的にも責任のある務をお持ちなのに、学園のことしかお仕事がないかのように、親身になって学園と共に歩んで下さった委員会の方々、そしておしみない協力をして下さった保護者の方々、また教職員の熱い愛校心と協力が聖母から奇跡にも近い恵みを引き出し、今日の日を迎えることができたのだと、あの定礎式からの十年間を振り返りながら、シスター・アンジョリーナ・バローネと祝宴に臨んだ感激は大きかった。

また、文字通り学校を自分のものとしてすべてのことを共有し、一喜一憂してきた生徒たち

の喜びも大きく、校舎内を浮き浮きと喚声をあげ、手を叩きながら見て回っていた姿が今も目に浮かんでくる。

校庭の整地

こうしてひとまず校舎ができ上がってくると、日は自然に校庭にむき、夏には背丈くらいにも伸びる雑草、風が吹けばまるで砂漠にいるかのように校舎内に侵入する砂塵、体育の授業にも不自由な校庭をなんとかしなければと考えていた時、I造園のI氏ならお安くして下さるでしょうといわれる方があり、昭和四〇年三月末にお出でを願った。アンジョリーナ校長の話を聞きながら、じっと校庭を眺めておられたI氏は「時間的に制約されず、ある程度私におまかせ下さるなら、なんとか致しましょう」と、お引き受け下さった。

それから間もなくして、小型ブルドーザが運びこまれ、飯場跡はきれいになり、校庭は平らになった（当たり前のことであるが、今までがあまりにも……）。クローバの種も蒔かれ校庭は大きく様変わりをした。が、I氏は「門から正面玄関までなにか植えて並木道を造りませんか？」と言われ、「それはとても素晴らしいことでございますが、まだ、整地の分もお払いしていませんし、予算もそんなにございませんので……」と、お断りをすると、「お金のことはご心配な

く。前に、おまかせ下さいと申し上げたのはこのことです。私にできることをできるときにさせていただき校長様に協力したいのです。どうぞご心配なく」とのことであった。

でも、ご父兄に甘えるのも……と再三辞退したが、怒らんばかりのお勧めに、それでは……と、東大のイチョウ並木を思い、いつかはあの様に……と、夢見るような期待で、「それではお言葉に甘えましてイチョウの苗木をお願い致します」と答えた。こうして植えられたイチョウは今、二抱え近く大きくなって星美のシンボルにもなっている。

また、I氏に、中・高設置計画の途上での多くの困難に遭遇したとき、「もし、中学・高校が設置されたならば、感謝のしるしとして校庭にルルドを造ってお恵みを称えます」とアンジョリーナ校長が祈りのうちに聖母に約束したルルドの設置をお願いした（もちろん建設費をお支払いすることは大前提であった）。

I氏は早速関口教会にルルドを見に行かれ、図面を引き、自然石を主体としたおそらく日本でも最高に立派な素材のルルドを造って下さり、昭和四二年三月末には卒業生が除幕をし成城教会主任司祭大越師が祝福して下さった。しかし氏は今回も代金はお取りにならず、せめて『このルルドはI氏のご好意によってできたものである』とのプレートを嵌（は）めたかったが、氏はこれも許してくださらなかった。

こうしてシスター・アンジョリーナ・バローネの聖母との約束は果たされた。――ルルドの

設置に備えて聖母像をイタリアに発注したことを知った生徒たちは家から新聞を毎日、毎日、持ってきてこれを売り、ご像の購入費に当てることにした。この計画は家庭にのご父兄は製薬関係のお仕事をしておられたが、試薬瓶の梱包に新聞社から新しい新聞の残りを購入していたのであり生徒たちの力で聖母像購入の資金は調達さらからご像が届き、梱包をとくときの生徒たちの喜び、騒ぎはたいしたものだった。

つぎは体育館

I氏のご協力によって校庭は平らになり、美しいクローバで覆われたが、他設はなく、雨天の時は半地下のホールを使いなんとか授業をしていたが、球技等の広さと高さを必要とする授業はできないし、単なる集会のためにも体育館建設が話題になりは手狭であったので、昭和四三年頃から体育館の建設が考えられはじめた。

ちょうど小学校と法人としての計画が始まったて……。小学校は講堂を主とした体育館を、中・高は体育館としての機能を重視し建設委員会ができ、U氏を中心について素案作りがはじまった。

（この時、この大事業に対応するために委員会を拡大強化すべきだとの案が出て、小学校一二名、中・高一二名に建設委員をお願いし、更に、その中から八名の専門委員が選出された。U氏と一緒にO氏を平河町の事務所にうかがい建設委員会のスタッフとしての、お働きをお願いしたのは昭和四五年の四月末のことであった。快く協力をお受け下さったO氏はこの時から、U氏とご一緒に体育館建設のためにそして後に後援会の会長としてご活躍下さることになった）。

六月には選出された体育館建設委員会の活動が始まり、専門委員の方々は、ご自分の本職を忘れ、これが本務でもあるかのように、何度も、何度も夜遅くまで会議を重ね（時には十時を過ぎた）、それぞれの専門分野での意見を出され、喧々諤々と熱気に満ちた討論がなされ、この熱気の渦に巻き込まれたものだった。

中・高は、本格的な体育館を夢見て、いろいろの学校の体育館を見学して参考にし、シャワー室、ロッカー・ルーム、特にギャラリーを利用して一〇〇メートル六コースのトラックを設けること、床のスプリングは入念にすることに意を用いて検討をしていただき、何度か設計の変更もお願いしました。

シャワー室、ロッカー・ルーム、床のスプリング等は思いがかなえられたが、ギャラリーのトラックに関しては、「ギャラリー分の床面積の増加分の費用がかさむ」くらいだろうと考えたのはこちらの甘さで、検討の結果トラックに使用するには床のスプリング、壁面の強化、鉄

筋の増加等の強化、の上に、床面積増加のため消防法による防火シャッターや種々の施設設備を新設し、既存の校舎の方も大幅に改修しなければならなくなり、莫大な費用が加算されることが判明し、とても予算の目途がたたず涙をのんでギャラリーのトラック計画は割愛された。

その上、あんなに期待し、何度か設計の変更をお願いしたのは、一体何のためだったのかと気落しそうになったが、体育館の構造そのものについても鉄筋コンクリート造りではなく、軽量鉄骨を使い、ボードを嵌め込む構造に変更をせざるをえなくなり、委員会の皆様のご苦労を水の泡にするような結果になり、本当に申し訳ないことだった。

この体育館建設過程でシスター・アンジョリーナ・バローネが示された、委員の方々に対する信頼と包容力は並々ではなく、皆様が、ご自分の持っているすべてを差し出して協力しようとの意欲、雰囲気を自然にわきたたせたのだった（どうしても、何かお手伝いをさせていただきたくなるものがありました、と、後日何人かは語られている）。

こうして一九七一年（昭和四六年）二月二日に定礎式を行った体育館は七月一七日に落成式を迎えた。

七月三日には小学校の体育館の定礎式をそして翌年三月一八日には小学校の体育館とは思えないような立派な体育館の落成式を行うことができた。

後援会のお願い

小学校講堂の落成式を間近にした、三月半ばに、「二一世紀を目指して、より良い教育を行うために、さっている皆さんに、経済状況の変動によって困窮した児童・生徒の援助等、学校を側面から援助する『後援会』を設立していただけないか」との、唐突のきらいもあったシスター・アンジェリーナ・バローネの発言に、それまで何か寂しい雰囲気の集まりが、急に、活気付き奉仕委員会との関係は？　期間は何時まで？　具体的には？　等々質問や意見が百出するなかで、専門委員会最後の集まりの時、残務整理をなったのだった。

四月二二日には目黒星美学園後援会設立準備委員会が発足し、保護者の中から選出された一六名の方々が、事業目的、予算等の素案作りを開始し、一九七一年（昭和四六年）六月四日新装成った小学校講堂で、目黒星美学園後援会設立総会が開催されて、O氏が初代会長に、また副会長、会計、監査等の役員も選出されて、新しい活動が始まり、以後、今にいたるまで教育環境の整備・充実にお働きくださることになったが、ここに記され目黒星美学園の創設期の施設に関する大まかな出来事を走るように見てきたが、ここに記されなかったたくさんの恩人方のお働き、多くの出来事を思い浮かべるときに感謝の熱い念がこ

み上げてきて、神様がこれらの恩人方を豊かにお恵み下さるようにとの心からの感謝祈りが泉のように湧き出てくるのを感じる。

なお、持っているすべての力と情熱をもって学園を創設し、限りない愛情で児童・生徒たちを愛し育まれた愛と信仰の人、シスター・アンジョリーナ・バローネは、二〇〇二年（平成一四年）四月から入院生活に入られ、現在はふじの温泉病院で療養生活の中で、卒業生の方がご親切にお連れ下さる機会にお見舞いにうかがうとそれでもほほ笑まれ、時にはありがとうとかすかに理解できる言葉を発して静かに日々を過ごしておられる。

半世紀近い年月をご一緒した者として、とても複雑な気持ちになるが、神様にすべてをおゆだねして、これからの残された日々を、『シスター・アンジョリーナ・バローネと祈りの二人三脚』をしながら一緒にいただいたお恵みと皆様方のご親切への感謝の祈りをしながら、過ごしていく決心をして、シスター・アンジョリーナ・バローネとの二人三脚』を終える。



シスターの研修旅行。Sr. アンジョリーナとSr. 笹田。いつも一緒

インタビュー●

第1章

目黒聖美学園はどのようにしてつくられたのか

シスター・アンジョリーナ・バローネ／ダルフィオル神父様／シスター・ジョゼッピーナ／鈴木和子先生

シスター・アンジョリーナ・バローネ

インタビュー

「放課後に英語を教えて家賃に当てたの」

○まずはじめに、目黒星美学園ができるまでのことをおうかがいしたいと思いますが……。

世田谷のことと、目黒の星美をいつ、どういうことで始めたかってことですね。簡単なものですが。学校を始めたか。それ全部、一応、記録として管区長の方に置いてあります。

目黒は「無原罪の聖マリアのみこころ」に捧げてあるの。マードレ・リンダ・リコッティ総長が一九五四年に始めたの……。

どうして始めたかというと、サレジオの神父さまたちが、どうしても幼稚園で学んだカトリックの教育を続けて受けさせたいという望みでね……。「この子たちが、良いことを習っていて、本当に心をつくるものを持っていても、普通の学校へ行けばあとは終わりでしょう。それ

がもったいないと。それで、マードレ・リコッティ総長に頼んで、長に「どうぞシスターを送って下さい」と言ってね。

○あの頃は、サレジオの日曜学校にも生徒がたくさんいたんですね。

もう、いっぱいだった。だから神父様方に幼稚園の三教室を借りて学校を始めたの。うちのものじゃなかったから毎日通っていたの。あのころは毎月一万五千円だった。そしてむところがないから家を借りて……。その家から毎日通っていたの。あのころは子どもたちが今度二年生になるときに、一三四人ぐらいだったでしょう、どこうことで、毎日幼稚園の二階から、あそこ幼稚園の裏にある土地を見て、眺め毎日そうだったとも、困っていましたから。一万にあげるでしょう。そして、私たちの泊まるところが毎月一万二千円。

お金が少しもないのね。どうしたらいいかわからなかった。だから、私は生ちのうちで誰か英語を習いたい人がいれば、何時から何時まで、私が教えますと言ったの。もう既に学校でも英語を教えていたんですけどね。学校の後はなんて言うんですか……放課後？　放課後に……。

生徒たちの方は、自分たちもできると思っていたから「自分たちも、もう一度学校でするこ放課後にね。いくわけ。だから放課後してほしい」って言うわけ。だからだったかしら、

百円……。安かったですけど、放課後にやってお金が別に入った。お母さ
○人ぐらいに頼んだんですね。学校でも英語教えていたのに、放課後にも
それから、そのお母さんたちは一週二回とかだった。お母さんたちはグル
○私がいたときにもまだ、特別の英語教室はありましたね。
ずっとありましたよ。だから、そのお金で私たちの生活ができたわけ。
借金も。どうしてかというと、そのとき、日本は戦争が終わったばっかり
でも、何かをつくる、何かやり出すことはいっぱいあったんです。
もお祈りだけしかできないですね。お金で助けることができない。管区
あの、できないんですね。皆が何かをやり出すところだったでしょう。だ
ろで……。
他の支部、静岡とか、皆、何かをやり出すところだったでしょう。どん
その中で「新しい学校を」って……。結局、やむをえない。私たちが自
や……、一生懸命やらなくちゃ。だから、今度は御父兄からでも一万円を
て一万円だった。初めは……。
○持ってきたんですけど、これがその後援会の学校債……。
ああ！　持ってらっしゃるのね。最初の入学式の写真も……。

この子たちが二年生になるのに土地がなかったの。二階から畑を見て……ねー。サレジオの神父様方、とても明るい考えを持っているでしょう。周りの人は皆いい人で、自分のやっていることと同じように苦しかったか、こっちは二年生になるのに、「もう、やめろ」っていうことがあったの。ある時、ある人から「売るから来て下さい」ということが本当に思ってたの。

もう、どんなにお祈りしたかわからない。

そういう中で、五月の終わりころ、一人のお百姓さんが、三百坪（たった三百坪じゃ何もできないけれど）売ってあげると言ってきたの。それを買ったの。

ところが一番はじめのこの分をつくるときに、ここに二〇メーターの道を作る予定で……と。都庁は何も言わないでしょう。二〇メーターの道が通るから」ということで認可してくれないでしょう。でも、既にここには御聖堂もちゃんと（計画の）道の上にあるわけ。だから毎日のように出かけたの。大使館の何だか、かんだか、全部回って、坊やたちには「都庁に行くからお祈りしてね」って言って、お祈りしたらしいのね。ほとんどのお偉いさんのところは全部行きましたけれど、最後、もうどこも行くところがないから、都庁の一番上の人、何て言ったっけ、安井さん……。

安井都知事から祝辞が届く

○安井都知事さんです。これですね。お祝いの言葉をくださっている。
ああ、学校ができた時の、まあー。
○読みましょうか。「本日、星美学園第二小学校の落成式を……」

祝　辞

本日、星美学園第二小学校の落成式を挙行されるにあたり、一言お祝いの言葉を申し述べたいと思います。当学園は偉大な教育者、聖ドン・ボスコによって創立された、扶助者聖母修道会の全世界に及ぶ教育事業の一環として、北区袋町に創立され、現在、二千人近い児童生徒をようするカトリックによる教育の伝導として発展してまいりました。昨年三月、さらに遠大なる理想学園の構想のもとに、この地をして星美学園第二小学校を開設し、このたび、第一期工事の落成を見るに至りました。まことに本校の将来の発展を期待するにふさわしい、喜びでありまして、心からお祝い申し上げる次第でありま

す。本校の教育はカトリック教的人類愛の精神を基礎として、道徳教育、しつけ教育を中心とする人格者の育成にあることは周知の通りであります。近頃、青少年の生活態度については好ましからざるものが多々あり、まことに憂うに耐えないところですが、これを戦後の社会悪にのみ、せしめるべきではなく、我々はさらに教育の面において大きな責任を感ずるのであります。消化されない自由主義教育が、放縦とわがままに陥らしめるなど、戦後の教育のあり方には幾多の問題が指摘されている現状にありますとき、人類愛と奉仕の精神を柱として、道徳教育に徹する本学園の教育は、現代教育に与える一つの灯火として、ますますその輝きを高めつつあります。世界の平和の文化発展に貢献すべき、新日本建設の基盤が教育にあることは申すまでもありません。ひとりひとりの心の中に、平和を愛する心を養うこと以外には、真の世界平和は望み得ないと信ずるのであります。本校は、世界平和のために日本に蒔かれた一粒の種でありますとすくすくと伸びて、その尊い使命を果たすことができますように。関係各位の一団のご努力を希望する次第であります。

昭和三〇年三月二〇日

東京都知事　安井誠一郎

三月二〇日……。
大雨だったんです。
あげる」って言うの
ら学校をつくるため
リア様のご像を建て
玄関の前の池……。
○あのマリア様の像は私が来てから建ったんですね。校舎ができたときに
そう。最初の分を
うしてるかしらね、
○亡くなられたんじゃないでしょうか。
物質的な恵みだけ
をもらったの。涙が
サレジオの御聖堂は、この学校の仕事によってだんだん信者が多くなっていきました。だから、学校だけじゃなくて、そのそばにあるサレジオ教会のためにもなったわけ。物質的な恵みも多かった。そういうことですね。

へえ……。嬉しかったのねえ、あのとき。あの道の
「どうにかしてくださいませんか」って言ったら、「三
。三カ月が六カ月になったけど、都市計画から道を消
の認可が出て、そしてやったわけね。そのときにね、
るっていうことで言いましたね。そうなったから、ご
あるでしょう。
建てて。それから初めて建てたの……。ところで、東
今は。
やないでしょうか。
じゃなくて、大勢の皆さん、生徒さん、そして御父兄
出ますね……。

最初の生徒募集案内パンフレット

私、最初に神父様が生徒を募集するために使ったもの、持ってる。最初は神父様方が募集をするために使ってたの、最初。これ、これだったの。募集するためにね。生徒たちを募集するためにね。あの頃は、よね。

○ああ、見たことありますけれどね。

これ、私たちじゃなくて神父様が取っておいたの。こういうふうになってるのね……。

○あ、これ見たことあります。

これ全部ね。実際は何もなかったの……。

○そうです、この絵（構想図）を見たことあります。

これ、ここに御聖堂をつくるでしょう。新しい御聖堂つくるときの……。これ、ここに御聖堂をつくるでしょう。新しい御聖堂つくるときの……。こ神父様ね、昔の御聖堂こういうバラックだったのね。こういうふうだったのね。

○そうです。ここからまんが映画を日曜学校で見せたんですね……。

この「PROPOSED PLAN」（構想図）は、募集するためにつくったんたけど。

○サレジオ教会で見せてもらったのかな。私は。

構想だけよ。

これ、一つしかなかったから、私がずっと大事にとっておいているわけ。

○ああ、あそこに全部高等学校までできる予定だったんですね。

男子も女子も全部。これね、私たちが目黒行く前に神父様方が作ってたの。そして、こういうふうになる。想像だったのよ。私が着任したとき何もなかった。

マリアさまにお願いしながら事業を進めた

マリア様の像を建てることを約束して、結局ここまでしかできなかったの。これ、約束したの、マリア様と。

中学校のことも心配だったね。どこもつくる場所がなくてね。そして四年生になりはじめたとき、御父兄がもう「中学校どこ」と、もう始めたの。

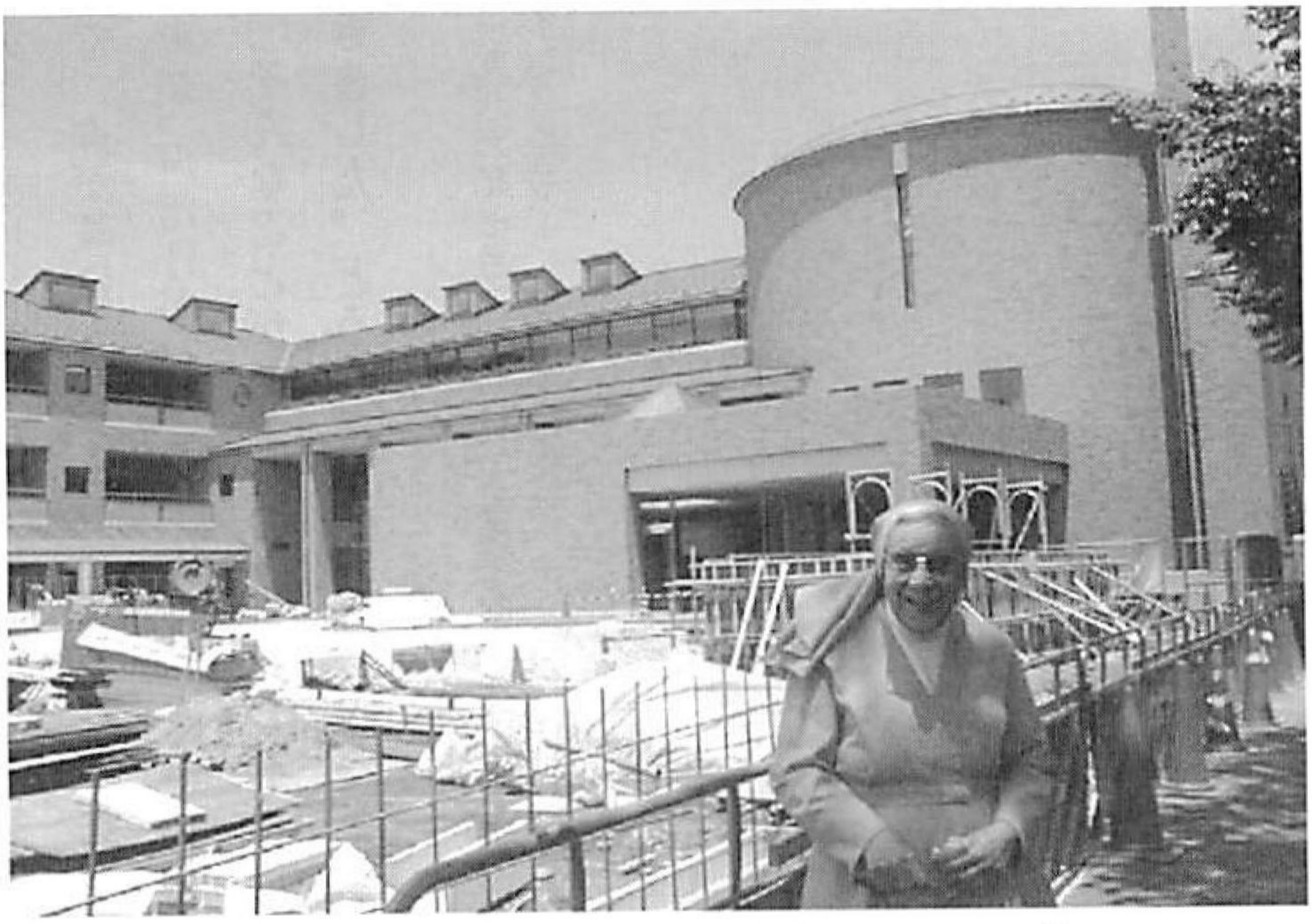
○目黒の地に学校をつくる。生徒が大きくなる。上の学校が必要になる。その都度、大変なご体験をされたと思います。どのように乗り切られたのでしょうか。

あのときね、高等学校をつくる時も「どうしようか」、と、もう、高校一年になるのに何もなかったから。どうしたらいいか、本当、真っ暗だったね。最後になってから、できないということになって「マリア様、考えてください」と祈ったの。祈っていたときに、マリア様の声

がはっきり聞こえたの。「自分の子どもたちのことを私は考えてる……」と。はっきりした声で。声が耳に入ったら、パっと目が覚めて、ただ、その声が、声だけがパっと……。真っ暗いところでした。不思議だわ、本当にマリア様の声がしたの。

○そんなことがあったのですか。不思議ですね。今日はたいへん貴重なお話をきかせていただきました。どうもありがとうございました。

一九八九年七月二十九日
インタビュアー　横尾千畝(せんぽ)先生　星美学園・赤羽修学院



建設中の小学校新校舎の前で。2000年夏のSr. アンジョリーナ



卒業生と昼食。左よりSr. 中島、Sr. 笹田とSr. アンジョリーナ

ダルフィオル神父様

インタビュー

学校を始めるきっかけ

○まずお聞きしたいのは目黒星美学園ができるまでのお話です。先日、シスター・テレジーナにお会いした時「小学校のことはダルフィオル神父様を抜きにしては語れませんね」とおっしゃいました。いろいろと考えたのですが、目黒星美がどうやってできたのかなってことが私たちにとってはすごく不思議なことだったんですね。そうしたら神父様からということで、それで、いろいろうかがわなければならないことがいっぱい出てきまして……。

わたしも不思議だよ（笑）。

○まず、星美をおつくりになるには、どのような構想があったのですか？

ちょうど、幼稚園ができてからですね。

○私たち幼稚園の五期生ですから、私たちが入る五年前にサレジオ幼稚園ができたんですね。

幼稚園は、最初は講堂の裏の小さな部屋で始まったでしょう。あとで子どもが増えて裏の方へちょっと伸ばしたんですね。あと部屋を二つ、二階とね。それでも足りないから、結局、幼稚園が始まって三年目にコンクリートの建物ですよ。二階建てを建てたんです。この地域で最初のコンクリートの建物ですよ。

みんな驚いた。

えていくと二階まで使いましたね。二階の映画をやるところとかね。今だったらできないでしょうね。大胆でした。素晴らしい幼稚園といわれて（園児が）どんどん増えて四八〇名までいったよ。あなたたち五期生の時になると、お母さんたちは「神父様、学校も建ててくれない」というようになった。

○父兄からの希望だったんですか。

当時、私はチマッチ閣下（神父様）の指導で日曜学校なんかをやっていました。幼稚園してから、できればカトリックの小学校に進ませた方がいいんじゃないかと思ってみていました。……本当に田舎だったよ。

ちょうどその時、御聖堂ができた。大きな教会がね。一九五四年、あなたたちが卒園する時たから二階で信者が使っていたところを司祭館に移しました。幼稚園の二階が全部空いたでしょう。幼稚園はそのままで。それで、ちょうどいいなぁと思ったわけ。しか

し、その建物は、みんなサレジオ会のものでしょう。学校をつくる手続きはどうするか考えました。私の親類は反対しました。そして、シスターまで「土地も何もないんですよ、神父様」と。私は「いや、なんとかなる、土地はあちこち買ってあるんだから。交換すれば必ず土地が見つかりますからね。隣の土地が少し空いてたからね。そして、土地は」と言ってね。隣の土地が少し空いてたからね。そして、シスターの管区長には「土地も何もないのに、学校を始めるなんてちょっと考えものですね。承知できません」と言われたね。

チマッチ閣下が学校づくりにゴー・サイン

○それでも幼稚園の父兄たちが頼んできたのですか。

頼んできたから、私は「何とかやろう、なんとかしてあげます」と答えたね。

○サレジオ会としてのお考えではなかったのですか、神父様個人のお考え……。

そうです。チマッチ閣下に相談してみたら「やれっ、何とかなるでしょう」と言われてね。それで私は、直接サレジオ会の本部とシスターの本部の総長様に「今、こんな状態で何もないんです。しかし、土地は確実に手に入る」と手紙を書きました。代わりの土地は、私が安くあちこちで買っていましたから。

○その土地は、神父様が御自分で買っていらしたんですか。

あちこち、方々ね。

○資金はどうなさったのですか。

ここで大きなことをしようと思っていた。私たちはミサをたてるたびに、アメリカの恩人からドルをもらっていた。それで方々の土地を買っていた。

例えば、今、あそこに入り口があるんだけれど三百何坪でしょう。「ちょっと売ってくれ」と。そうしたら、次に「ちょうど、そこの角に天理教があるでしょう。そこの持ち主のお百姓さんに相談して「私の所に土地がある。そっちは三百何坪。あなたのところよりも十坪多いから交換しましょうか」って。そうしたら、今度は、建物を増築した所があるでしょう。そこは大きな四〇〇坪でしたね。小山さんというおじいさんが持ち主。大きな声のおじいさんがいたでしょう。

○小山造園のですね。

そう。造園のこっちの方。そして、私は、あなたの土地が欲しいと言った。もう学校の一部ができていたからね。そうしたら、「やだよ、神父さん、」と。それで、「あなたは知らないかもしれないけれど、あなたの家の裏の方に四〇〇坪の土地があるでしょう。それは私のものだよ」って。

「そんなの知らなかったよ」と、「そう、だから交換しましょう、向こうの方が多いよ」……、「ああ、そうします」と。それで、その土地ももらったね。

他にもあちこち土地があったね。一〇〇坪、二〇〇坪、全部細かく分かれていてお百姓さんが違うでしょう。それで、全部ばーっと貰っちゃった。しかし高い値段じゃなくほとんど買った値段と同じくらいで。システーもお金を出してくれたね。

最初の土地は約束があった一人のおばさん。システーと一緒に「土地をどうしよう」といってた時に「知ってるおばあさんがいるよ」と。今、碑文谷警察の前に何か建物ができているでしょ。

○福祉会館。

そこのおばあさんは友達だった。その地方の（財産のある）お嬢様だったね。「すずめのお宿」があったね。あそこの二人のお嬢様が向こうの土地を持っていた。それで、もう年だから、なんとかしてと説得しました。そうしたら「はい、譲ります」と。けれども、向こうが土地を売ったけどお金を貰わなかった、そして騙されたと言いはじめてね。私は警察の署長と一緒に行って「明日、お金を払いますから土地を譲ってください」と。

そして、あくる日になると、朝、早くから警察署長から電話がありました。「神父さん大変だ、あのおばあさんが死んだよ！」と言う。これは困った。なんだか知らないけれど、あとで聞いたら、夜に小さな貝をいっぱい食べて、消化できなくて、八十近くのおばあさんだから、

それで亡くなったそうだ。聞いた時はびっくりしたよ。土地どうなるかと。それというので、私は保証人になるからといってサインした。それであの土地は全部、区のものになった。

○相続人がいないから……。

そう、私はあのおばあさんの向こうの土地も全部買おうと思った。中学校をやるためにね。それでどうなったかというと、仕方がないから、区の方に連絡を取ってみようと。こうしてやっと最初の何百坪が学校のものになった。あれが最初に手に入った土地。もう安心しなさいと。最後が角の問題ね。大変長い話ね。土地のこと。

○最初の土地はちゃんと買えたんですよね。でも角が欠けていたでしょう。

最初はこれだけ買った。これと、あとちょっと買ったけれど。これがまず、始まったときの建物。

○神父様が初めにかけた代金とか、何か代替えみたいなものは、星美学園から出たんですか。

あとでシスターが払ってくれるよ。それは買った時の値段よ。

○買った時の値段は星美学園の方から。それとも完全に寄付されたのですか。

寄付はできない。自分のサレジオ会だからね。それはやっぱりできないの。何年かたってからちょっと余分にくれるでしょうと……。

○最後に残った角の土地はお御聖堂の前の、「リボン」に売った土地と交換したんですか。

いや「そこではいやだ」と言うんで、シスターも何回も探して、やっと環七の所の土地がいいということになって、リボンの所を売ってそっちを買ってやっと交換してもらえたんだよ。

○そして中学の土地を世田谷に探したんですね。

中学校と高等学校の土地のことではずいぶん苦労したよ。シスター・テレジョリーナも一緒に行ったりして。その時にシスター・テレジョリーナもいたね。最後は、広くて静かな土地を手に入れた。最初はどうなるかと思ったけど、結局あとになってまわりに家ができたでしょう。はじめて中学に行った時は寂しかったでしょう。

○春休みに「見て来なさい」って言われて行ったら、草だらけで、途中までしか行かれなかったんです。

そうでしょう。

○砧緑地があった頃だから。ところで、碑文谷の土地もいろいろあったようですね。

買った土地に神父様が陣頭指揮で盛り土を！

私はね、碑文谷の土地を買った時、サレジオ会の大神学校（杉並）に教授でいたね。それで

買おうかどうしようかと相談していた。ちょうどその時に、この土地を買うのは反対だった。
う話があってね。その時、私はこんな田舎に土地を買うのは反対だった。
家ができなかったということを知っていますか。
　学校のこっち側には、まだ、高射砲陣地があったとき爆撃があったところだよ。まだコンクリートの台が残っていたり
して。家を建てちゃいけなかった。どんどん上から爆弾が降ったんだよ……。だから、前に住んでいた人は皆や
○それで、この辺はずっと家を建ててはいけなかったのですね。
　当たり前だよ。上からどんどん爆弾が降ったんだよ……。だから、前に住んでいた人は皆や
られちゃったんだよ。ちょっと家があったというところも全部。知らなかったの？お父さん、知って
いたでしょう。
○知っていると思います。父は陸軍にいましたから。
　この辺は一番低いところだった。沼地だった。雨が降ったら、知っていたりしました。
てるとすぐ倒れるでしょう。
○台風のときにその川が溢れて大変でしたね。
　川は溢れて、向こうからこっちへ来るんだよ。誰が水の中に家を建てるでしょうか。それが、
どうしてこんなに良い土地になったかというと、周りに、あとでアスファルトの道ができたで
しょう。それで、掘った土をどこかに運ぼうとしていたので「その土をここへ売ってくれない」

と言ったの。「あげますよ」というので、それで土を運んでは盛り土をして、りして地面を上げていきました。そうしたら、今度は、講堂の中に水が溜まるようになった(笑)。

○今のあちらの園長神父様と一緒にやったんですか。

いや、一人でやったよ。神学生が来て手伝ってくれたんだけれど。ほとんどは私一人でやったよ。大変だったよ。この土地でなかったら簡単に手に入らない。それで、んでくれ」ってね。日曜日は休みでしょう。みんな日雇いだから「先生、仕事はいでしょう」と。そして、区役所に頼んで「その日雇い労働者を使っていいか」「倍払って、昼のお弁当も出す。そっちの土をこっちへ運んでくれるだけでいい」とね。

○先見の明、事業家ですね。

○神父様は、そんなふうにはちっとも見えないから、不思議ですよねえ。

今はね、隠居になったからね。歌は続けているよ。昨日も四時間歌って、金曜日は六時間。今晩もね。月曜と火曜の朝だけ、ちょっと空いている。ただ、今度教えてくれといわれたから、今度は火曜日も忙しくなるね。

戦前の軍の道路計画と対決

○それから、放射線。道路の補助線を作る話。何かお分かりのことがございましたら。

シスター・アンジョリーナは大変だったよ。（図で書いて説明）これが星美の土地ね、ここが建物、学校はここまでできていたんだね。これが玄関でしょう。これができていたんだね。この度、増築するというので、お役所に行くと「コレだめ、できない」と。「どうしてこにちょうど、このラインがあるんだよね。二四間の大きな道が通る。ずっと行く」そう言われたんだよね。

でもこっちには私の御聖堂ができている。だから問題があるんだね。いいですか、ここに教会があるね、大きな御聖堂。ここに塔もあるね。御聖堂を建てたときは、二四間の大きな道が通ることを言わなかったよ。軍隊を運ぶためで、図を見せても「それは前の計画よ」とね。

イタリア大使館に行ったら弁護士は言ったね。「法律では、あなたの家がこっちにあった場合、新しい計画は、家が動かないとだめ」、これは世界中の法律だけれどね、と。「計画があっても、あなた動いちゃいけません」って。「道ともどもこっちの方へやればいい」「最後まで頑張れ」って。本当に計画があったんですけれどね。

結局、目黒区役所に聞いたよ。目黒区は知っていたよ、この道のこと。そして「いいですか、

目黒区の道は全部こうなっているよ。計画はちゃんとあって、今の道ができている。しかし、これは軍隊だから、勝手にこうやっているんだよ。戦争前はそれでもよかったけれど、ここに家がいっぱいあるでしょう。だからね、頑張ってください」って。

○目黒区役所でも頑張ってくださいって。

当たり前。だってこの道要らないもの、もう軍隊がないから。そして、この道、ちゃんと環七からとび越えて環八を通って、結局、海まで行くぐらいの道。軍隊のための道。環八より広い道よ。「頑張ってくれ」って言うんだから。頑張らないとだめだよ、この世においては……。

○神父様は自分の目の黒いうち、いや、目は黒くないから〝青いうち〟は通しませんよっておっしゃったんでしょう。叔母がよく言ってましたけど。

結局ね、ここはね、今度は、国際問題になってくるの。私は「動かない」といったの。「あなたたちの間違えだから道を変えろ」と。「民主主義ですから、軍国主義じゃないよ」とね。

○どこの管轄なのですか。軍部でなく東京都でしょう。

都の管轄じゃない。これ、軍部の計画。

○それが都に残っているのですね。

残っているの。軍部は、昔は独裁者でしょう。区に相談しないでパパパッとやったから、その時に頭下げなければみんな首になったでしょう。

○でもね、時代が変わりましたからね。
ああ、時代が変わった。ですから、区役所がちゃんとこうなっている。変んなこうなっているでしょう。区役所はこう、たらどうするか。全部ひっくり返っちゃうんだよ。
軍部がやった時は、実際、家は全然なかったり。今は、もう家を建てられるんだよ。戦後は、誰もそのお金を払って終わるんだよ。田舎だからお百姓さんにろが出たでしょう。私もびっくりしちゃったよ。
○じゃあ、もし教会も学校もなかったら、ひょっとしたらそこに道が……。
いや、何のためにするか。環七がそこにあるんだから、意味がない。
○シヨートカットが問題かわかりましたか。
ですからね、何(笑)。
この計画を実行するならば、みんな退かなくちゃならないよ。全部お金払ってもらう。あちこちで計画するでしょう。東京でもどこでもね。
い。計画の意味、わかりましたか。こうして許退け退けと、皆にちゃんと払わなければならな
向こうの間違いだから、私は頭下げなかったしが出ました。
○実際の交渉はシスターたちが行ってましたね。

……だから問題はねぇ、やっぱり自分の事業なんだから最後まで頑張らないと。行ってね。「ここに道があるでしょう。こうしないでこう回ればいいじゃないか」けれれば、ここはこうしないで、こうすればちゃんと行ける」と。都庁は「それはそうだけど、そうしたくない」と。「ずらせばずらせる。どうせ東京全部こわさないといけないんだから」と議論しました。

○あの当時、シスターたちがいつも都庁に行くたびに、「お土産」といってバターボール食べられたんですね。交渉のために毎日都庁のあちこちに回されて……。こういうことがあってバター練り上げた計画書に本部がようやく許可

ですから、学校については、イタリアのサレジオ会と、主にシスターの問題ね。は、これこれと当てがある。そして、シスターは金がないという。「金のことは一応こうなっているから心配いらない。子どもが一二〇人入る。入学金はこれぐらいで先生にこのくらい払う。毎年このくらい要る。六年たったらこの借金を全部払う」と、全部書いたんだよ。

○神父様が全部考えてお書きになったんですか。

全部許かないと困るんだよ。空想じゃなくて、事業だから。管区長様は、これこれの問題と心配していた。土地は儲けようとするんじゃなくて、買った値段でね。だから安かったんだよ。一人一〇〇坪持っていてね。「神父様お金が欲しいので、十万ぐらいで売ってあげる」と。幼稚園の近くに百何坪があった。すごく現金が欲しいというので、「いいよ」といって。まさか、私は十万で買ってシスターに一千万で売るわけじゃない。

そんなことで、やっと本部から「やらせてあげましょう」と。それで父兄に「子どもを（通わせて）くれるか」と言った。三組、一二〇人の子どもが欲しい。だいたい誰が来るかとわかって、ちょっと足りないとわかったから、よそから入れたよ。あなた、ここの幼稚園じゃなかったね、そうそう。みんなその時、ミッションスクールに入れたいでしょう。一二〇人以上いたよ。それで、幼稚園の二階は全部学校が使っていたんですよ。こうして日黒星美学園がスタートしたのね。

○はて、この学校はどうしてできたんだろうって、よくわからない所がいっぱいありました。私たち、何にも知らないで入って育ってしまったけれど……。

これは初めて話す秘密だよ。だから、私はいつもシスターと一致してね。一年たったら、向こうの建物が入り口までできた。玄関からそこまで。

○バルコニーがありましたね。あれが第一期の工事ですね。

それで結局、一年たってから土地を交換したり何かしてね、問題を解決した。

二期目には、まだ他の建物の土地は手に入ってなかったよ。なかなかあのおくれない。「こっちの一〇〇坪をあげるからどうですか」と言ってね。そのていった。「あなたの土地はこれと、少し余分をあげるからどうですか」と言ってね。そのんて大したことないでしょう。何年もしたら、二十万。昔の値うちを考えなを考えて「あげますよ」と言ってくれた。今の値打ちとしたら何億だけれどお金のことを考えちゃいけない。事業が進めばいい。事業は事業だから。うにうまくいきました。

最後は角の講堂ができた所まで、最後まで見守ってあげましたよ。最初はるみたいと言われたけれど、大体こういうふうにうまくいったんですね。あえるでしょう。空想を描いていなたたちもそう見すべてシステムに任せていた

○サレジオ幼稚園があってサレジオ中学校、高校とありますけれど、サレジオ自体で小学校をお作りになろうとはお考えにはならなかったんですか？

それはね、私たちサレジオ会は小学校のためじゃない。幼稚園は特別な許しんだから。サレジオ会が最初の幼稚園をやったのはここ碑文谷。最初の管区長だったから、「やれっ」と言ったんだよ。幼稚園には父兄が集まるから、うんじゃないかと。あとで九州とかあちこちに作ったけれど。サレジオ会は幼稚ない。だから、私たち（神父）は園長だけれど、全部他の先生がやるんだよ。宗先生がやっていたでしょう。私はこっちに教会があって、たまに顔を出して先生にお話をして、最初のお祈りをして、最後のお祈りをして、それでいいととかは全部私たちが見るんですね。幼稚園は先生とシスターが全部やっているは名前だけ、お子どもと遊んで、ですね。

我々サレジオ会が学校をやるというのは大変だよ。チマッチ閣下は「シスタ星美のシスターでできなければ他のシスターに頼みなさい」と。この時はシスやりますよ」と言った。シスターが増えるし。それで、ここには三人のシスタター・アンジョリーナ、二番目はなんだっけ。

○シスター・ジョゼッピーナ、シスター・バルバラ。

あの時、まだ学校の建物ができていないから住むところがないでしょう。シに住んでいたか知っている？　学芸大学のすぐそばに借りていた。歩いて通っ

分もないからね。

○家は神父様が探されたんですか。

いや、それはシスターが探していたでしょう。地主の人を知っていたからね。ちょっといい所はないかと、静かな所で……と。

○それはシスターとご一緒にお探しになったのでは？

もちろんですよ、シスターの家だから。

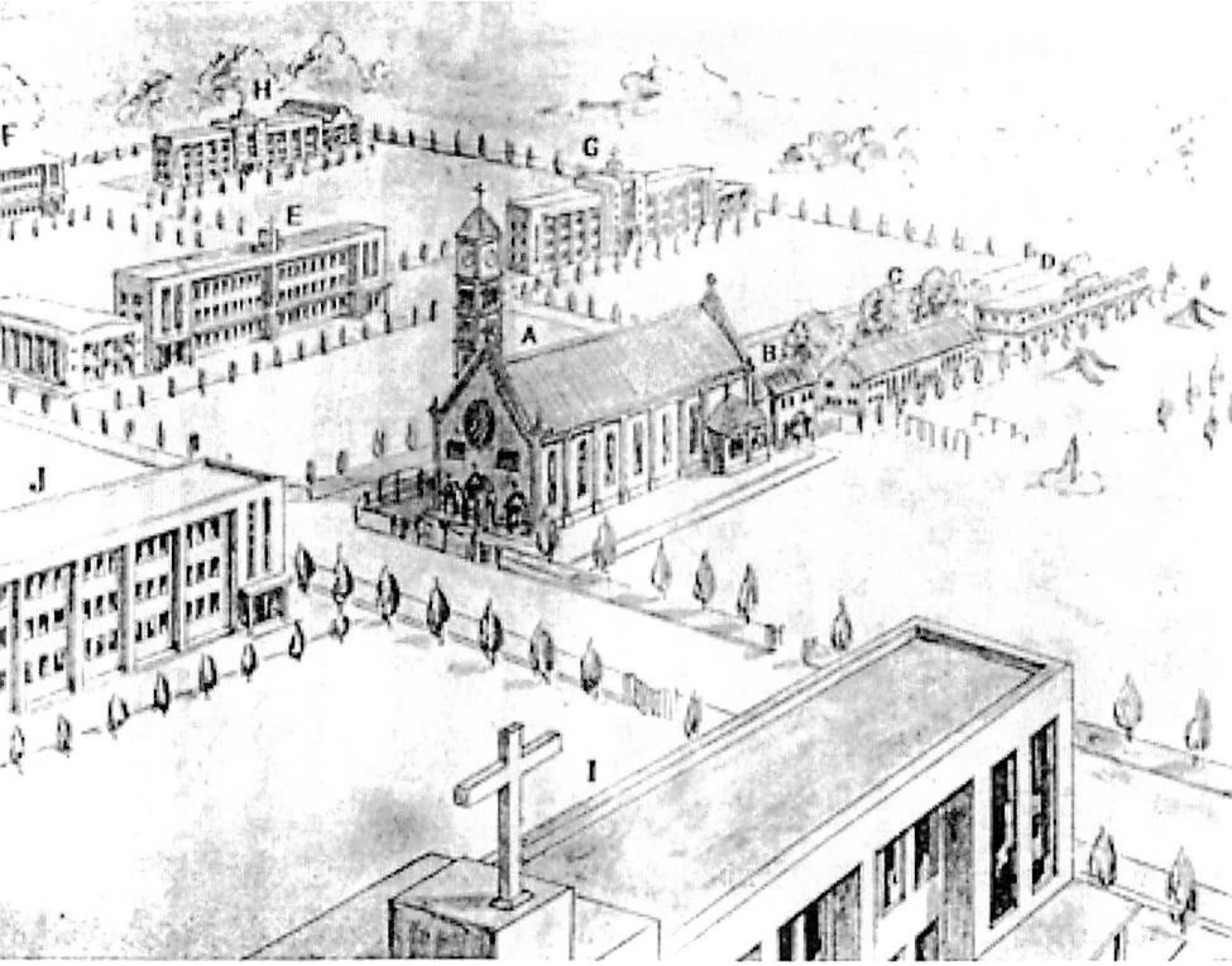
○そのことをシスター・テレジーナはご存知ないんですよね。神父様が見つけて下さったと思っていらっしゃるようでした。

それは忘れているんでしょう。私はちゃんと知っている人がいて、あのおばさん、サカイさんが「自分の家のそばにいい家がある」というので借りたんです。何年もいたね。そのあと、私はもう退いてシスター・アンジョリーナが全部やったよ。

○最初に一大「サレジオ村構想」というような形で大学までの青写真ができていて……。

それ、私はその考えだったんです。一九五二年に初めてイタリアに帰ったとき、帰っている間に、最後はこうやる……」とね。私はコルシ神父様に「困ったことをした」と発表したんですよ。

「御聖堂ができる、御聖堂を造るということを考え、その「サレジオ村構想」を言ったんですよ。周囲のお百姓さんは怒ったよ。そして、一度にパーっと何倍にも土地が上が



目黒サレジオ会学校　計画図

○目黒サレジオ会カトリック教会の現況

A　聖　堂（1000人収容）
B　司祭館
C　講　堂（1300人収容）
D　幼稚園（500人収容）

○扶助者聖母会・女子学院計画

E　小学校（1200人収容）
F　女子中学校（450人収容）
G　女子高等学校（450人収容）
H　女子大学（600人収容）

○サレジオ会学校計画

I　男子中学校（450人収容）
J　男子高等学校（450人収容）

った。コルシ神父様は何とかやろうとした。ところが、これが間違いでした。

○そんなことがあったんですか。

ところで、生徒は一二〇名ぐらい……。それで先生方はどうやって……。

にいらっしゃいましたけれど……。

人は幼稚園にいい先生がいるからと。そう鈴木和子先生。幼稚園が一人犠牲をして、あと二人シスター探すと。

○シスター・テレジーナは先生まで神父様が手配されたとおっしゃってましたが。

学校はシスターの学校よ。私がした仕事はね、建物と土地のことだけね。物質的なものだね。……ただ、あとで音楽が好きだったからどんどんやったんだよ。

どうしてわたしが歌を教えるようになったかは知っているでしょう。私は（大人にも）歌を教えていたでしょう。シスター・バルバラは子どもの歌のこと、よくわからなかった。歌うとオンチで、皆たまらないでしょう（笑）。それで、私は小学校の音楽の時間を二時間もらって無料で教えていた。みなさんに「アー、アー、……おなかで歌う」と、「口は食べるためだけ」と教えたね。

○宗先生も協力なさって……。

宗先生が協力したというのはね、結局、子どものことと、父兄に対して「星美にやりまし

よう」ということをね。大変だよ、宗先生は。卒園する子どもを幼稚園からあとで、だんだん経済が上手くいかないから、それで「じゃあどうするか」っても小学校に五十何人行ったよ、小学校に。やっぱり幼稚園が中心になってる。て川崎に幼稚園を創ったかといったら、子どもが小学校を当てにして来るようレジオには小学校がないから、毎年こっちに十何人来るよ。だから結局いい土ちのシスターにとってね。

そして、今、日本人は経済的に楽になったから、みんなールを希望するから、みんなやっぱりお金はかかる。先生にはゃいけないでしょう。もし、そのときシスターがお金持ちだったらいいでしちこちで事業をやりだしたでしょう。どこでも借金だよ（笑）大変だよ。建物りる……。

○ここの土地を担保にして。

お金を借りた。そのとき一千万ぐらいだったかな。

○おうちが建っちゃいますね

こっちは、まあ、もう幼稚園が始まったらお金はいくらも自然に出てくるからね。シスター

に、「この一年はこのぐらい入る、このぐらい入る、

三年目は……」――入るものはどんどん増えるでしょう。出るものは先生への支払いだけでしょう。だから計算したら六年間で全部借金は払うと。そして、シスターを入れるなら、先生としてシスターにも給料を払う、それはシスターに残るよ。また、年の終わりには修道会の本部に支払う。本部はこの学校から毎月入るから、貸してくれる。やっぱり一つの会社みたいになっちゃうの、最後はね。シスターもその点はわかってる。

金なしでは何もできないよ。そして、シスターは「どんな服を着ましょう」とか、「どんな化粧しましょうか」とか、お金を使わないでしょう。シスターは、いつもあの服でしょう、食べるものは安く買うでしょう、リンゴ一つ買うよりは箱で買う方が安いとか、そういうことも考えなければいけない。そこで、結局、節約するからお金は残るんです。自然に節約になっちゃうのね。みなさん修道会のことわからないから……。

そこでシスターを二人入れたでしょう。給料もらうでしょう。二人に払うでしょう。それで学校にお金が残るじゃない。だから私は空想ではなくてちゃんと計画を書いて、一年はこのぐらい、月謝はこれ、入学金はこれ、だんだん貨幣価値が下がるから入学金は値上げしてもいい……と。しかし借金は増えない。もしも一千万円の借金をしたならば一千万円残るよ。だから今は借金したらダメだよ。だんだん物の値打ちが下がって、一千万円だったら、シスターに言ったの。「貨幣価値がだんだん下がるから、うんと借金をしなさい」と。でも、

五、六年したら数百万の値打ちもない。そうなっていったの。このように私は計算した。商売人の息子だからね。洋服屋でね。（イタリアで）いくつかある大きな反物屋さんの息子だからね。

制服にも神父様のアイディアが活かされた

○そのことをお聞きしたのでちょっとお聞きしますが、神父様が星美の制服のことについていろいろとアドバイスをされたそうですが。

そうそう「なんか、あんな重苦しいのでなくて、もうちょっと現代的にして」と、「夏は、黒いのよりも色をつけて」と。シスターは「赤羽ではやったこともない」っていうけれど、「だから、これからやればいい」ってね。やったときには、ちょっと文句をいわれたけれど。「こんな暑いところでは、夏はどうすればいいの、長いズボンはもっと短くして軽くしたいよね」と……。そうでしょう。

○そうすると赤羽に行った子どもたちは、制服っていうのはなかったのですか。

いや、赤羽にも目黒にもあったけれど、夏になると、もういやだって言ったの。

○最初の制服も、女子だけ赤羽とちょっと違うんですね……

（赤羽のは）重いの。だから軽くしなさいって。

○襟型もちょっと違うもので……。

「もうちょっと軽くしなさい」って言ったの。あれは戦争前の服だったね。

がなかったんだよ(笑)。あとで、だんだん赤羽も変わったよ。

○赤羽の制服っていうのは、イタリアと同じものですよね。

同じだね。イタリアは、日本のような湿気がないんだよ。夏になると、岩の中に入るとすごいくらいなんだよ。だからイタリアでは重いものでも大体大丈夫でしょう。

サレジオ会で初めて、私は白いこの服を着たでしょう。こっちは湿度八〇位でしょう。あんな黒いので行くのは結構暑いよ。すぐ白くしたよ。今、神父たちはみんな白くしていて、軽くしているでしょう。

ないなんてそんなことを言うんじゃない。インドをみてごらんなさい。みんな白くしているでしょう。伝統、その国の伝統。こっちは違う国だよ。だから「あなたたちはこの日本のための伝統を作りなさい」とね。そういうこと、忘れていたけど、よく言っていたよ。

事実を見るのは、すべてにおいてね。伝統とか何とかどうでもいい。人間は進歩するから。小さい子どもは大きくなるでしょう。全体が変わっていくのです。皆さんそういうふうに考えなければね。

○今、赤羽も同じ制服なんですか。途中から全部一緒になったようですが。

いや、向こうが真似したんだよ。日黒で新しい形にすることに反対があったじゃない。だから、「システー、頑張れ」って言ったんだよ。何事も〝Festina Lente（急がば回れ）〟だよ。ここに石があるでしょう。ぶつからないで遠回りすればいいよ。遠回りしている間にぶつかった人はわかるでしょう。何かがわかる。そうすると前に進むよ。

碑文谷への赴任は、留守番役だった

○この間、システーのお話をうかがってびっくり仰天しました。こういうことで小学校建設の事業が始められたのですね。

戦後すぐここの教会を建てているあいだはあれこれと盗まれてね。ガラスを取られたり……。大神学校の教授をやってたときに、チマッチ閣下に、「ちょっと一時期留守番してみて……」と言われました。神学生は夏休みだったからね。わたしはいまだに留守番してるんだよ！　他にまだ命令がないからね（笑）。

留守番役を引き受けて碑文谷にやってきたよ。司祭館には、初めはガスもないから七輪でいろいろ作ってね。日曜学校やろうといってもね、子どもはどこにいるのか、キャベツ畑にでもしようか、なんてね。

でも、何とかやってみようということになったそれで日曜学校が始まった。何とか始めてみると、どこからか子どもがやってくる。ここからはお百姓さんの家しか見えなくて、あとは森でしょう。ここの森は自転車で走れるんだけれど、恐い。誰かが出てくるんじゃないかとね。砂利道を上がって行くんだけれど、ポッケにはお金がない。けれど命があるから……。

○もう、その時は四〇歳位ですか？

三五、六でね。自転車であっちこっちの家に、毎晩二カ所は行っていたよ、布教に。一軒目は七～八時まで、二軒目は八～九時まで行って。毎晩ね。

○あちら側はずっと家があったんですか。こっちの方は。

ずっと向こうを越えて、結局こっちの大きな溝（立会川）があるところからは家があった。

○そこまではなかったんですね。

そして水は、幼稚園が建つと井戸では危ないから、向こうの溝のところに水道の本管があったので、そこから自分で管を買ってきてこっちへ引っぱったの。

○ここの土地はどうやって見つけられたんですか？

これはサレジオ会の上長がいっぺんに買ったの。地主はお金がほしいから売ったんだよ。だから留守番してたよ。本部が買った。戦後は、あちこちに誰もが勝手に家を建てていてね。人の土地でも誰もいなくて空いていたらプレハブ（バラック）がパパッとできるんだよ。

○それで、神父様が自分のポケットマネーで周りの土地を……。

いやいや、あとでサレジオ会が買った。私は戦後のアメリカ人のね、従軍司祭。戦後すぐね。それで横浜とか立川とかへ行っていた。それで日曜学校が始まったことがわかると、どんどんアメリカ軍がモノを持ってくるんだよ。だから、チョコレートとかチューインガムとかたくさんあっただろう。一銭も出さないよ。バットとか何でもあったよ。

○あの時は、ごちそうさまでした(笑)。

恵比寿に、イタリア人の兵隊がいて、そこに勤めている神父と仲良くなったの。オーストラリアには米があるというので、送ってもらったよ。お金はちょっと払えばいいというので。全部オーストラリアにかくまっている日本人のためのものだったから。それを全部、ヤミでなくバザーやって一般の値段で売ったよ。毛布とか、服とかなんでも。やはり、それで事業をやったということで。何でも手に入るようなことね。ミルクとかアイスクリームとか、アメリカからいつも入るから。

「長靴の国」から、「ミミズの国」へ

○そういうふうに神父様が一生懸命やっている時に、ふっと自分のご両親とか、お国のことを

思い出したりされた時はありませんでしたか？

忙しいから寂しくなる暇がなかったね。というか、私は一七歳で全部捨ててきたんだよ。家族はみんな反対した。日本に来るのに船で四〇日もかかるんだから。小さなヘビみたいな、ミミズみたいな国へだよ。家の人は「あんたそこまで行くの」と。うちのおばあさんなんか「わあ大変だ。シャム人、あの野蛮人の中に行って、殺されるんじゃないか」なんて。

ただね。私は中学校の一年になった時考えたよ。こっちはイタリアは「長靴」。向こうの日本は「ミミズ」、同じだよ、小さくてね。だからどうなっているんだろうって。イタリアと同じようでしょう。暖かそうな国で、細長い。それで、いろいろ特別な地理の本を図書館から借りて、詳しいことを読んでね。そして、今度は学校の図書館に、日本のことがあったの。『肉弾三勇士』（注）というの。それをイタリア語で訳してあったの。それを見てびっくりしちゃったの。そんな国民がいるのか、素晴らしいってこと。旅順のね、日露戦争のこと。その本を最初に読んだの。あなたたち知ってる？　若い人は知らないんだね、だからいやなの（笑）。一二歳の時ね。その本を読んだ。そんな精神の国民がいる。それを見て大変感心しました。

（注）日露戦争の旅順攻囲戦に参加した陸軍軍人（少将）桜井忠温がその体験を著したもの。

○それを中一の時にお読みになって、今まで覚えていらっしゃるんですか。それで日本への気持ちを……。それほど印象が強かったんですね。

でも、その時は日本へ行くって、まだ全然考えてなかった。偶然に来たの。

○イタリアでご希望を出されたわけではなかったんですね。

全然。日本に対する関心を、神様がなんとか聞いて、私を投げてくれたのでしょう。

○『肉弾』……(笑)。

そう、みんな驚いていたよ。一二、三歳でどこかの志願院に入るんだよね。宣教地に行く志願院に。あとはどこの宣教地に下るかは希望を出すんですけれどね。私は中学校の五年の終わり頃に、いきなりサレジオ会に入りたいと言った。「ああそうですか」と。暴れん坊で、二回も退学になりそうになったぐらいだから。おかしいでしょう。勉強はできるんだけれど、ちょっと遊びばっかりでね。それで一六歳で修練院に入って、あとはトリノのそばの大神学校に入ったんです。

それで、学校が始まるのは九月でしょう。一一月のはじめになると、歌なんかを一生懸命やっていたんだけど、本部から宣教師係の神父様が来た。それで私を呼んでいるというから、また何かで呼ばれたのか、学校を辞めさせるんじゃないかって思って行ったの。そうしたら、今度の一一日に宣教師の船が出るという。日本に行く三人の神学生がいて、一人は行かれなくなった。ちょうど二〇歳になって兵隊に行かなければならないから。それで、チマッチ閣下が、以前に八人の神学生が日本に来たんだけど、みんなオンチだから、音楽をちょっとできる人が

欲しい。だから「あんた行かないか」と言うんです。「じゃあパスポートの申請用の写真を撮ってあげるから」とね。「ちゃんと荷物を作っておいて、そして家の人に自分が日本へ行くということを言っておくんですよ」と。

問題は家に帰った時だよ。そんなわけだから、早く帰って家に行くと、門の前に叔父がいて「入るな！」と。「自分の神父を裏切るものを家に入れちゃいけない」と。何しろ、学校から逃げたと思っているんだよ。またか、とね。大きな声でおばあさんと叔母さんと「どうして家に帰ってそうしたら、彼等は泣き出して「どうしてそんな遠くに行くの、死んじゃう」と。まあ、結局二日間家にいました。

一一月一一日はイタリアで聖マルティーノの日、引っ越しの日ね。その日に船で出発して四〇日かかって、（一九三〇年）一二月二三日に日本に着いたの。

○よく覚えていますね

あたりまえじゃない、一生のことだよ。それで、チマッチ閣下のことで、だかというと、中学校一年（一九二六年）の時にチマッチ閣下が日本から戻ってきて、各地でスライドをやってね。私たちの学校にも来たの。それで歌を歌って、きれいな声で日本の歌も歌うんです。きれいなバリトンの声でね、気に入ったんだよね。いい、日本。グラウ

ンドでチマッチ
ないよ。

悪戯っ子の暴れん坊だった子ども時代

○神父様の、その発声法や何かは、神学校で学ばれたのですか。

子どもの時イタリアでね。イタリアの神父は、どんな小さなところでもコーラス隊を作っているんです。だから、子どもの頃から学べました。そして、神学校で、私はいつも音楽をやっていた。あとは、特別に戦後碑文谷へ来て一年してから、専門の人から頼まれて声楽の先生の通訳をしていたの。そして、私も最後にレッスンしてもらったの。それから、あちこちチマッチ閣下と歌の指導をして回ったんだよ。

○神父様がどうして日本にいらしたかってだけで、本ができそうですね。

私は、まだ死にたくないから書くつもりないけどね(笑)。ただ、私の子ども時代のことを書いたら大変だよ。私は四歳までは病気ばかりして歩けなかったの。昨日、暴れん坊でね、というのも、私なんかないからね。だけれど、そのあとは全然病気しない。ただ問題は、中学一年くらいまでチビだった。まん前の席でしょ。悪戯ができないにもかかわらず悪戯しち

やった……というのを書くと大変だから(笑)。

○私たち受け継いだんですね、悪戯……。

悪戯で、動いて動いてサッカーばっかりやってて一番後ろになっちゃったよ。

まっ、死ぬ一年前になったら書きましょうかねぇ。

○貴重なお話を、しかも大変なご苦労話を楽しくいました。

幼稚園の古い講堂で催されたマンガ映画の時にわれていた神父様のお姿が重なります。天国でいつまでもお見守りくださいますように。

一九八七年六月二九日　カトリック碑文谷教会
インタビュアー　山口憲行、駒野かほる、斎藤雅子、山科さよ子

シスター・ジョゼッピーナ

一二五人の大きな家族

インタビュー

○まずお聞きしたいのは目黒星美学園をおつくりになった頃の思い出です。イタリアから日本にどのようにして来られたのか。子どもたちへの思い出も含めてお願いします。

発展したわねー、小学校。本当に立派になったわ、内容がね。あなたたちは可哀そうだったけれど。

○いや、でも一番面白かったかもしれません。

親子で親しむわけ。私だって全部の親子の名前を覚えてたわ。規模が大きくなるとだめなのね。私も、まだ、日本に来て間がなかったから日本語よくわからないけれど、若いから、一生懸命書いて覚えたの。

本当に家庭的な学校でした。あなたたちも可愛かったの。そして親しむの。今とは違ってい

たのね。一二五人の大きな家族、すごく親しかったの。

あなたたちのお母さん、お元気？　会いたいわ。どこの学校へ赴任しても目黒とは違ってて、目黒が一番懐かしくてね。

○シスターの場合は、目上からどんな形でお話がありましたか。

私の場合は面白いのね、マードレ・テレサ・メッロという管区長様に、何か必要な物をもらいたくてお願いに行ったのね。一生懸命話すのに、ちっとも気を入れて聞いてくれない気がしたのね。きちんとした返事もしてくれないの。そして終わったら、管区長様「話は終わりましたか、あなたはそんなこと心配しなくていい、目黒へ何しに行くの」に行きなさい」

私「えっ？　私、目黒へ明日あさって日黒管区長様「会計ですよ」

私「会計？」

お金、まだ触ったことないの。仕事としてお金を扱ったことがなかったの。だから目黒へ行ったとき、あなたたち（日本）のお金、千円と五百円の区別がつかなかったの。でも、私なりに数えて、後で聞いたら半分の金額しかないって言われたの。五百円を千円として数えてしまって二倍の金額になって、とってもお金持ちになったのよ(笑)。

○それまでは何の仕事をしていらしたんですか。

シスターになる前の修練者の監督官を四年間していました。そこはお金を扱う所ではなくて、霊的なことばかりでね。急に日黒へということで、何でも漢字で書いてあるでしょう。わかんないの。

そしてまた受け取り（領収書）が問題、何を書いてあるのか字がわからないから、先生は子どもたちに問題を出して自習させておいて、私に教えてくださった。藤田先生は私を助けてくれた恩人なの。

○最初に目黒に引っ越す日に、院長様が「あなたたち、お金持っているの？」と聞いたことがあるんですが。

あれは、私が気が付いたの。会計でしょ。門を出る前に「あなた、お金持っているの」と聞いたら誰も持ってない。「じゃあ今晩何食べるの」と。

○それで院長様が一万円を？

今ならけちと言われるかもしれないけれど、当時はそれで十分生活できたわけ。尊いお金でしたね。

○一万円で始まった学校ですね。

最初は三谷町から通っていたの。ちっちゃな家を借りて六人で始めたの。

○当時一万円札はなかったですね。五千円札も。
だから千円と五百円を間違ったの。十円札と一円札もありました。あの時五個買えたの。
○私たち七つのときだからよく覚えていませんし、お金の価値もまだわかりませんでした。月謝はいくらだったのかしら……。

宣教の地は「中国」のはずが！

○シスターが日本にいらしたのは修道会のご指示ですか。
私たち、宣教地に行きたい人は、遊びと違いますから、まず親の許しをもらいます。あの当時は宣教地に行くともう帰れません。特別に日本を選ぶこともできません。
たんですが、父が悲しみながらも許してくれました。
そして、大学で勉強しているときに目上が来てね、「どこを選ぶか」と聞いたけれど、その時、私たちシナ（支那）しか知らなかったので「中国」と答えたの。そしてパスポートを作るときに、やっぱり「中国」が当たったの。
中国へ行かなければならないことになったけれど、戦後すぐでしょ。昭和二五年（一九五〇年）

ですから。ジェノバの港で船に乗って、出発直前に「中国には今入れないから許しが出るまで日本で待っていなさい」といわれたの。

日本に着いたとき、私にとっては日本も中国も、どちらも知らないから同じだったの。でも、いまだに許可が出ないみたいでここ（日本）にいますよ（笑）。

本当は行く国を選べないんですよ。私が「中国」と言ったでしょう。そして偶然に中国に行くように言われたけれど、見てごらんなさい。中国へは行かなかったでしょう。

○中国で戦争が起きていなかったら、今ごろ中国にいらしたかもしれないんですね。

日本に一九五一年一月二一日のお昼に着いたのに迎えが来ない。実は手紙がその日に着いたので間に合わなかったの。私たち「船から下りません、誰も来なかったらサンフランシスコに帰ります」と言ったの。サンフランシスコまではイタリアの船で来たし、そこにはシスターがいたから「そこからジェノバに帰ります」と言ったの。サンフランシスコから日本へはアメリカの船でした。

○じゃ、インドの方は回らないで太平洋回りですね。

あの当時、ローマを出発した日を入れたら五〇日間。船は旅客だけじゃなくて、荷物もあったの。だから、私たちはとっても楽しかったの。荷物を積みおろしするために港に泊まるわけ。お弁当もらって、街にいって、夜は七時に戻ればいいの。一日中、街に出て歩き回りました。

フランスにもバルセロナにも行って、グアテマラ、ホノルルなどたくさん回ってきたの。

○ところでお迎えは来たのですか。

やっと薄暗くなった頃、遠くからひとつのジープが見えて、それにシスターナが乗ってたの。

○（爆笑）それがシスター・アンジョリーナ・バローネとの初めての出会いですか。それで、そのまま赤羽にいらしたのですか。

そうです。でも、シスター・アンジョリーナ・バローネとは、ここの目黒に来た時に初めてお仕事が一緒になったの。それまでは一緒じゃなかった。シスター・テレジーナは、彼女が修練者のとき、私がその監督官をしていたので知ってたの。だから親しいんです。

○シスター・テレジーナもシスターになられたばっかりの時でしたの？

ばっかりの時ね。

○じゃあ、目黒にいらしたときには本当にシスターのたまごですね。

シスター・テレジーナは、ずっと先生の経験があったの。もうすでに学校というものを知っていたわけ。

○シスターになられる前からですね。

あの人はもうベテランでした。私は教える人じゃないですからね。

シスター・バルバラが韓国で亡くなられたにいらっしゃるんですか。

○それで、六人いらしたシスター方は今でも日本

日本には、今、四人。あと二人は戻っちゃった。

目黒で始めた私たちの中で一人だけ亡くなって

二〇日に。ちょうど私が韓国に行って帰る前の日

べ方するなと思ったけれど。そうしたら家に着か

いったの。

○もともと韓国の方なんですか。

そう、だけどシスターになりたかったので戦争中に逃げてきたわけ。

○日本語お上手でしたよね。

そう。日本の学校を出ているからね。当時は、韓国のかた、結構日本語を話しましたよ。

○私の洗礼服のデザインをしてくださったんですって。

何でも上手で、手先が器用でした。創造性豊かな方でしたよ。しばらく日本にいて、その後自分の国に帰って韓国の仕事をしました。人気があってお葬式も人が多かったこと。

○あまりクラスをもってらっしゃいませんでしたね。音楽を少し。シスター・バルバラに関し

てちょっと面白い経験があったので覚えているんですけれど。私（樋泉）の名前が史彦（フミヒコ）で、西岡君が雅彦（マサヒコ）なので、その「コ」と勘違いしたんでしょうね。音楽の授業中に、二人の名前を読み上げて「女の子みたいな名前ね」って。

やっぱり子どものときは傷つくのね、男の子なのに女の子に見られるのは。

英語と小学校教員の資格も取りました

○中国語の勉強はその時なさっていたんですか。

あのね、来る前には、少し英語の勉強をしていたの。そして、中国の漢字、簡単なものね、少し、少しよ。

○日本語は？

日本語は全然。日本に来て、私、小学校の一年生から六年生までの教科書を一生懸命勉強したの。漢字も楽しくてね。全部の教科書を勉強したけれど国語を特にね、一生懸命勉強したのよ。ひとりのシスターが教えてくれたの。基礎の漢字から始めて少し簡単な漢字が書けるようになってきたら興味が出てきたわけ。一生懸命勉強したの。それで文部省から、ちゃんと免許状もらったのよ。英語を教える免許状と小学校の教員の免許状、ちゃん

と持っていますよ。

ある日、突然試験官が見に来たわけ。それで一－Bの教室かな、そこで「黒板に知ってることを全部書きなさい」と言うの。英語や日本語、まぜて知ってることを全部書いたの。

○それが試験だったわけですね。

もういろんなこと尋ねられてね。日本語まだ四年、五年目でしょう。だからね、まだそれほどでもないでしょう。

文部省がちゃんと見ていて、どれぐらい通じるかなと言われたの。全然日本語が通じない人は免許状をあげられないんだけれど、まぁ、土台があったから、イタリアの免許状を見せて、日本語が少し通じたから文部省がちゃんとくれたの。

目黒が一番楽しかった

○管区長様になられたのは。

大阪のピエトロ・ベッリ院長が管区長になって、私は院長になったから目黒から大阪に異動したの。異動は、いつも五年間なの。大阪に五年間、そして、また東京に戻ってはじめて六年間いたの。終わったら韓国に行って三年、四年。

韓国にいて、どうして戻ってきたかというと気候が合わなかったのね。とダメみたい。気候はとてもいいけれど、別に病気というものではないけれど、目が痛くなり、耳が痛くなり、と、また目が痛み出したわけ、なかなか治らなくて一五日間いるとすぐ治るの。そしたらすっかり治ったの。気候のせいなのね。

○アンジョリーナ校長様も気候が合わなくて帰ってこられましたよね。

そう、カンジュ（慶州）というところはね、とっても気候が良くて、湿気もないきれいなところなのに、若いときに行けばいいんだけれど、私たちのような年齢になると、もうもたないのね。日本に戻って一カ月も経つと治ってるんだから、日本の気候になれたのね。私は日本が合うんだわ。韓国でも中国でもなくて。

日本に戻って六年間、その後また志願院に三年、星美ホームに七年いて、今ここ聖ヨゼフ修道院に来たの。私、本当は子どもの方が好きなの。向いているの。本当には日黒が一番楽しかったの。だからラジオ体操のときは、私がレコードかけてあげたの。玄関のところに小さい窓があってその窓から見ていたの。子どもたちが体操するのを見るのが楽しかったでしょ、それ以外でもいろいろお世話になりましたね。

○勉強はもちろん見ていただいたけれど、

生活が楽しかった。本当に楽しかったの。

○オルガンが廊下に置いてあってそして、朝オルガンを弾いて下さったり。

そうなの。いろいろしなければならないでしょう。だからすごく私にとって楽しかった。

○校長様の霊名日の前というと、信者の子どもたちがみんな朝早く行って、朝練でしたね(笑)。

あなたたちも、すごくいい生徒でした。可愛くってね。呼びかけるとすぐ答えるグループでした。すごく活気があって、わがままとかそういうの、なかったわね。

いつまでも若ければいいけれど、どうしても病気には勝てないわね。あなたたち、今、何歳になったの、いったい？

○ちょうど四〇歳(インタビュー当時)です。

四〇歳、見てごらんやっぱり……。

○星美ができた頃のシスターたちよりも、はるかに年取っています。でもあの頃、子どもの目からはシスターがすごく年齢のいった大人に見えたんですよね。

見えたかもしれないけれど二十代でした。

○シスター・テレジーナに言われました。なんかそういう風な口ぶりで話をしたら、「冗談じゃないわ、私たちは、今のあなたたちよりよっぽど若かったんですよ」と。

だけれども、まだ生活自体が単純でした。今のようではなかったわよ。いらしてる父兄も面白かった。

○すごく家庭的でしたね、協力的で。

家庭的ですよ。協力的でね。お母さんたち。最初の一二五人はね。学校がだんだん大きくなると変わってきたけれど、最初一二五人は本当に可愛いかったの。すぐに行動するしね。あなたたちの場合は私たちと一緒に生活していたのよ。真面目に勉強していたしね。

○そうですか(笑)。真面目に遊んでいましたけれど(笑)。

勉強の時間は本当に一生懸命だったわね。英語を見ていても可愛いかったのよ。

○私たちも外国人のシスターに教えていただくのが初めてでしたし。何でも珍しかったんです。

ダルフィオル神父様やコルシ神父様に助けられて

あなたたちみんなが、サレジオ幼稚園から上がってきた人だけではないでしょう。

○僕はサレジオでした。ごく一部を除いてほとんどサレジオですね。

サレジオ幼稚園からでしたか。だから神父様に慣れていたのね。

○いや、僕は日本語を喋る人は外人だと思っていなかったから(笑)。

ダルフィオル神父様は切手をたくさん持っていてね。私も切手を集めていた時期があったから、しょっちゅう取り替えっこしていました。ずっとやっていたのを覚えていますね。

もう一人、コルシ神父様を覚えてらっしゃる？　学校ができ上がって一年目かな、イタリアにまだいらっしゃいますけどね、あの方も一生懸命でした。ダルフィオル神父様とコルシ神父様の二人が一生懸命呼びかけたわけ。自分たちの幼稚園のお子さんをカトリックの学校に行かせたかったのよね。そうしたら「シスター、学校、学校……」と。

自分たちは小学校を作れないから、私たちに一生懸命に「やれ、やれ」と言われてね。こっちとしては小学校だけじゃなく中高もあってほしい。父兄には大学までほしいと言われていたけれど。

授業をやりながら、校舎を増築

○校舎建設について何かお話はありますか。

そういえば校舎を建てるときにずいぶん物を盗まれたのよ。たとえば階段のセメントを流す準備をしておいたあれ高いものでした、当時は。セメントを流す準備をしておいたの。だから倍のお金がかかっちゃって。鉄を盗まれたりとか。

もう一つ不思議なことがあって、あそこは水が多かったので、基礎工事の杭は全部木ですよ。あそこは、むかし海だったの？

○湿地ですよ、沼地ですが。うちの方は今でも湧き水が出ますよ、清水町、学校からちょっとの所

　基礎工事はセメントじゃなくて全部太い木で、たくさん埋めていますよ。

○松か何か太いのをそのままドーンと埋めちゃうんですね。水で腐らないのかしら。

　水と空気が一緒に入らないから一番丈夫ですって。セメントはかえって崩れます。

○皇居のお堀の石垣の下には、江戸時代の松の杭がいまだに腐らないで残っているそうです。

だから今、四階建てに増築できるんですね、基礎がしっかりしているから。

　今は、でき上がったものを持ってきて組み立てるでしょ。あれは全部鉄筋ですもの。全部、その場でセメントを流してたの。

○星美の校舎はすごく丈夫でしっかりできていますよね。最近のビルなら一〇年も経つとひびが入ってきますよ。そういえば、いるから、もう三二年（昭和三〇年）に建てていつも校舎の横に針金が出ていましたよね。

　次の半分、もう半分と、あなたたちの学校をやりながら増築したのね。

○男の子はあそこにボールをぶつけて遊んでいたんですよ。

　金沢先生がデザインした小学校なの。とても心をこめて。

○どうして金沢先生がデザインされたのですか。

なぜかは私はわかりません。何かしらマードレ・テレサ・メッロが知ってう。とても丈夫に建てたの。

○小学校、中高も他の人でした。

金沢先生のデザインが丈夫でしょう。赤羽の本館も多分そうです。赤羽もそうなんでしょう。サレジオ

○やっぱり、小学校の建物が一番。目黒はあと五〇年、六〇年もつでしょう。

電気の配線がダメになってきているんですよ。時々漏電して。ブレーカーがどこをどう配線しているか何ないんですって。窓会のコンピューターがダメ落ちるんですよ。落ちるんだらない。それで同らわないとダメね。

ちょっと見てもになったのかもしれません。

○あの大理石の床とか階段にしてもね。きれいにはしていますけれど。

あの床もね、一番強いの。特徴はね、地震が時々あるけれど、ひびが少しですよ、あの廊下は。研ぎ出しと言っていたけれど、全部手で磨いていたの

○工事をしているときに見にいったことがありますね。

そうね、もう四年生になると興味が出ますでしょう。

○今と違って全部手で作っていたんですね。

今みたいに、機械もコンクリート・ミキサー車もなかった時代だったから。

素敵なバルコニー、そして屋上の音楽教室

○私たち、新しい校舎に最初に入ったときには二階の教室でした。正面玄関の真上でバルコニーのついた部屋でしたが、バルコニーには出てはいけなかったんです。

涼しかったでしょう。窓を開けて。

○全部開きましたからね。そこの前が御聖堂だったんですよね。廊下のつきあたり。

廊下は全部切ってあったの（増築用のため）。

○全部廊下の突き当たりがお部屋になっていましたね。

そう、三谷町から毎日通うと疲れちゃうでしょう。遅くなったり、朝早く出たり、近くても十何分かかるでしょう。

○今の体育館に行く渡り廊下のところが部屋になっていたでしょう。修院になっていて。

そして食堂があったかな。そして今の職員室のあったところが、ちょっとした屋上になっていて、そこで洗濯物を干していましたね。

よく見てたのね、子どもたち。

○よく見てました(笑)。そこの隣にちょっと入ったところに洗濯機が置いてありました。

そうそう。

○それで三階のお手洗いの奥のところにお風呂が作ってありましたね。

面白いことがあったの。ある晩、シスター・バルバラが「泥棒が入った」と連絡したの。前に、シスターは泥棒を見ていたし、確信したようすだったので信じたの。そしたら、湯沸し室の電気消し忘れただけだったのね。でもシスターは原因がわかってもまだ震えていたの。その後、スピッツを飼って、夜、学校にはなしていたんです。

○犬がいたの覚えています。

私が可愛がって餌をやったりしたの。そうしたらある朝、起きたら靴下も靴も何もないの。今度こそ泥棒が入ったと思って、シスター・テレジーナに「私のものが何もない。泥棒が入ったみたいよ」といって、見たら全部廊下に並べてあったの、私のものだけ。でも、犬は喜んでたの（犬の仕業）。

○屋上に音楽室があって。

まだありますか？　もうない？

○今、四階は全部教室になっています。

あー四階。音楽室があそこにあったわけはね、授業の邪魔にならないためにね。

○でも、あの屋上の音楽室は素敵でしたよね。

ほかの教室には聞こえないように。授業に邪魔にならないために屋上にしたの。

気付け薬は美味しいぶどう酒

○私の母が星美に出入りしていた銀行の人に聞いた話ですが、多分月謝か何かを取りに行ったんだと思うんですが、ちょうどお昼時で、食べていらっしゃいといわれて、お昼をご馳走になったそうです。そうしたらものすごく質素な食事をしているのでびっくりしたと父兄に話していたみたいですよ。

父兄に話していたのね。

○匂いはよかったんですけど……。マカロニの匂いとかね。

サンマの匂いがすると、よく子どもたち「あっ、今日もサンマだ！」とね。（笑）

○あれは横尾先生のためにって、おっしゃってましたね。下宿で自炊をしている横尾先生のお夕食を作ってあげるためにと。

ご馳走食べているとなると、やっぱり司祭館が記憶にあります。お昼休みに遊びに行くでしょう。そうするとダルフィオル神父様とかがお昼を食べているんですよ。

見ていたわけ。

○いや見てただけじゃなくて、いろいろ、蜂蜜とか、くれるんですよ。

ああ、味見して。

○味見をね。
だから太りましたでしょう。(笑)。
○でもシスターが召し上がるところは一切見せていただけないというかね。
やはり子どもでしょう。何をしゃべるかわからないでしょう。だから閉めるわけ。
風に解釈するかわからないでしょう。だから閉めるわけ。
○でも具合が悪くなると修院から美味しいぶどう酒をね、よくいただきましたの。
あれはミサのぶどう酒。
○そうそう、でもあれを飲ませてくれたので、あれからお酒が好きになったのかしら(笑)。
お酒好きになったの　大変だ(笑)。

三谷町の借家の思い出

○最初の頃は、どなたがお食事作りをなさっていたんですか？
最初はね、ちいチャンという女の子。
○三谷町の？
三谷町の。わがままな娘ね。やる時は上手なんだけど、わがままするとね、床に座っちゃっ

て。学校から私たちが帰ってもまだそのまま座って何も作ってくれないの。そんな時、私は
た買い物に行ってなんとかしてね。機嫌屋な子だから、機嫌が良い時には帰ったらシューっと
でき上がらせていたりとかね。
　一度ね、日曜に教会に行ったのね。私はニワトリを買っていて、知っているはずだから「ニ
ワトリ、今日やってください、しめてください」と言っておいたら、帰ってみると、なんだろ
う、とても臭いと思ったら、処理しないでそのまま煮ちゃったわけ。内臓とか全部。そしたら
隣のおばさんがへんな匂いがしたので見にきたわけ。食べられないですよね。わざとなの。
○そのちいチャンという方は今どこに？
　ちいチャンは千葉にいますよ、おばさんに。
○赤羽から一緒にいらしたんですか？
　あの人は別府から来ていたの。とってもお料理は上手なわけ。でもわがままで。このあいだ
「ご主人や子どもに、あのニワトリまだしてあげられるか」といったら笑っていた。
○一生言われちゃいますね
　本当に意地悪でしょう。でも、一番忙しいときに、ちょっとこれは無理だね、と思っても、
あの人はとっても縫い物が上手なの。あなたたちのブラウスとか全部あの人が縫ったの。とっ
ても上手。

○シスターと一緒に生活してらしたんですか。

下に二つの部屋があって、ひとつはあの人が使ったの。あとは、そばに仕立て屋さんがあった仕立て屋さんと一緒。一日に何枚でも縫ってたのよ。三谷町にちっちゃなお店があったの。とってもね、制服を作ってくれた。三谷町にちっちゃなお店があったの。とってもく心をこめてきちんとしてくれたし。注文どおりとしてくれたのよ。サイズ合わなければすぐ直してくれれどブラウスは間に合わないから、ちいチャンが一日百枚も平気で縫ってにしてくれたの。けくれたの。

○全然私たちは知りませんでしたね。初めて聞きました。お食事はどなたがなさっていたのかなあと思っていたんです。その人がいなくなってからは、ブラウスとかはどうやって……仕立て屋さんが自分で考えてくれたの。とってもデザインがよかったの。

○オーバーもその方が縫ってくれたんですか？

オーバーもその方ね。ちっちゃなおじいさんでね。背が高くなくてやせていた。

○覚えてます。寸法をはかりに来てくれましたよね。

そういえば、三谷町から通っていたある時、オーバーを作るのに生地を二階に置いていたね。仕立て屋さんがいらしたときに、私力がないから、狭い階段の上から投げたら下のトイレの壁を破ってしまったの。コンクリートの家のつもりで投げたのね。日本の家は弱いわね(笑)。

○あのオーバーの生地はイタリアから？
　いえ、生地はニッケでしょう。
○オールウールでしょう。

しつけを素直に受け入れた生徒たち

　最初の制服可愛いかった、男の子。ズボンの
○胸当てがね。靴下は長靴下でした。
　あの当時まだね、黒？
○冬は黒。夏は白のソックスです。
　一般はそうでした。みんなそうでしたね。
○長ズボンはいちゃいけないと、シスター・アンジョリーナに言われました。何か「イタリアでは日本でいう中学生になったら男の子は長ズボンで、それは大人として扱う印だから。小学生は半ズボンで、冬はストッキングで。逆に、ストッキングをはいていました」と。寒くても半ズボンというのは随分ありましたね。女の子は優先するとかね。そういうマナーが随分あって、陰でぶつぶつ言っていましたよ。

そういうの、男の子は感じ方が違うでしょう。

○部屋の中では、必ず帽子をとりなさいとよく言われましたね。それから、廊下を走っちゃいけないというのと、学校の外から来た人には挨拶をしなさいと。あれはよくやっていましたね。

やっていた。教えられたとおり、ちゃんとね。

○先生が荷物を持っていらしたら必ず持ってあげるというのもですね。

だから、あるご父兄は見て感心していましたね。大人が荷物を持っていたら手伝いましょうというのをすごくやっていたから。素直にね、教育されていたわけね。

○卒業してから学校へ行って廊下で人と会うとお辞儀しちゃったりするんですね。向こうが先にするというか、あ、しなくていいんだっけ、なんてね。もう最近しないですね。星美の生徒もね。でも、たまにちゃんとする子もいますよ。

まあ、まだ行儀がいいほうでしょう。まだね。たまにちゃんとする子がいるね。

○とにかく目黒星美は教室がきれいですよ。

勉強の雰囲気はやっぱりね。汚い雰囲気に置くと、小さい子どもは汚い人間にでき上がりますよ。環境も必要ね。学校で清潔・整頓をしつけられればね、やっぱり自分たちの部屋も整頓を守るだろうし。

ある家は畳あるでしょう、布団をひいたまま踏んじゃって、病気になるばい菌も生まれるし、

そういう風に、小さい時にきちんとしつけを受けると違ってきますでしょう。

○あと、父兄の教育というか、集まりみたいなので、しょっちゅうお話しするでしょう。

あなたたちのお母さんたち、以外と喜んで学校いらしてたんですよ。不思議ね。

たとえば、今の学校で父兄会をいやがるところもあるのよ。父兄に見てもらいたくないとかね。私たちは伸び伸びと授業をして、父兄にいらしていただき、父兄も喜んでね。もうほとんどの父兄がいらしていたの。だからみんな知っていたわけ。

○そういえば、夏になるとお昼休みにアイスクリームを売っていました。

購買部で。

あの時十円ね。子どもたち暑いから。

○誰があああいうものを置こうと言ったんですか。シスターでしょ(笑)。

そう、私でしょう。多分そうでしょう。

○そんな感じがしますねえ。

冬はね、温かいお弁当上げたいと思って、高橋木工さんに頼んだの。面白い戸棚をつくってくれたじゃないですか。

○あれ高橋さんの考えですか。下が炭でね。上に底に網が敷いてある箱にお弁当箱並べてね。

尊い歴史を語り伝えましょう

○面白いお話でしたね。

最初は面白いのよ、あとはね、そういうようなけれど、あ。どんなに犠牲をしてもね。

○ハプニングが多いですしね。

したよ。

○でも、小さなたちが一番可愛いかったの。どせんでした。

勉強のために学校に行っていたでしょ。今だかかったわね。

○シスターたちが、最初、三谷町から通っていらといろいろとお話を聞いて残しておきたいですねそれぞれの仕事によってね。

○皆様の話をうかがっていると、またいろいろうかがいたいことが出てきますし、これからも

っと調べることもあるでしょう。

本になると大変。たくさん言っていても、ちょっとしか書けないこともあるでしょう。

○そうですね、それとは別に、私たちが調べたいこと、知りたいこともあるしいずれ何年後かの同窓会で使えるんじゃないかと思って。

そうなの、歴史は尊いものですよ。

○今の子どもたちに、星美がどうやって創られたかということを伝えたいなと、よく学校とか、大人向けのものがありますよね。そういうのとはまた別にもっと子どもでも読めるようにしたいなと思っています。

一九八七年七月一一日　東京・調布市「聖ヨゼフ修道院」

インタビュアー　樋泉史彦、駒野かほる、斎藤雅子、張たみよ

鈴木和子先生

インタビュー

星美の話は寝耳に水！

○まず最初に、星美学園小学校をつくるというお話を先生が最初に耳にされたのはいつ頃、どういうきっかけですか。

そうですね、やっぱり寝耳に水という感じですよね。本当に。

○どなたからお話があったんですか。

宗先生あたりが神父様から聞いてきたんですよね。あの方が主任ですから。

○そういう学校ができる、だから手伝ってほしいというふうなお話ですか。

とにかく一貫教育ということでした。ま、幼稚園に続いているということはもうね。

○ということは、幼稚園からの続きの学校をと。

そう、幼稚園のためにつくるということでしたよ。

○それは、正式に職員会議のようなところでそのお話があったのですか。それともわりと気軽に、立ち話的に……。

いや、やっぱり皆を前にしてということですよね。まあむしろ戸惑うってやっぱり、今までとちょっとやり方が違っていくんじゃないかという恐れが出てくるわけですよね。

○それは幼稚園のやり方がですか。

幼稚園は何といっても自分たちで自由にやってましたし、ダルフィオル神父様も、あのゆったりした性格で伸び伸びとやってましたから。何か制約を受けるんじゃないかという心配があったんじゃないかと思います。

○小学校ができると幼稚園の方にも何か今までと違う意図が出てくるんではないかという心配ですか。

そう、何かいろいろと注文されたりね。私は直接的にはそういう話はきかないけれど、やっぱりサレジオの幼児全員が星美の小学校へ行くかという心配があるしね。今だってそういうことはありますよね。

○それは、今度こういう計画があって、幼稚園の先生の中で小学校の先生になっていただくというようなお話でしたか。

いえ、そういう話はなかったですよ。もちろん誰かがなるなんて話はありませんでした。

○その時はただ、今度こういうのができるそうですよ、というような……。

そうですよ。そんなものですよ。私も自分では全く考えていませんでしたが、コルシ神父様がしきりに「あんたはあっちへ行ったほうがいいんじゃないか」とおっしゃって……。幼稚園に残っていちゃ悪いような気になってちゃいましてねぇ。幼稚園という先生の寿命が短いわけよね。私個人のことからいえばですよ。だから、私は学校に行って事務をやってもいいなぁ、という気持ちは持っていたわけね。第一、妹が（シスターで）いたしね。コルシ神父様が「あなたは妹がいるんだから」ということで学校を勧めてくれたんですよ。で

○鈴木先生が星美の方へ移るということが……。

「冗談じゃないよ」という顔をしてましたよ。こんなこと外には言えないけれども、私は嫌な顔されました。コルシ神父様に勧められて、ダルフィオル神父様はすごく嫌だったの。生に嫌な顔されて……。私はもう追い出されたような気持ちでしたよね。ハッキリ言ってね。こんな気持ちでいてもしょうがないや、っていう気持ちでしたよね。

○それは時期的にはいつ頃でしたか。学校ができる一年ぐらい前ですか。

一年前なんてとんでもないですよ。

○もっと……。バタバタっと決まって、まあ入ってからじゃなかったかなもう、その年に入ってからじゃなかったかなうことはわかっていたと思いますけれどね。

○三学期まで幼稚園を教えられて、新学期から小学校で、という感じですか。

そうそう、だって何しろ二階ですものね。

○そりゃそうですね。ほかの先生方はどうなんですか。何かご存知ですか、その辺の、当時のことを。

そう、やっぱりみんな嫌な顔してましたよね。そりゃそうですよね。

○あのときは、あとは藤田先生ですか。

そうそう。藤田先生は、シスター・テレジーナが連れてきたんです。赤羽で高校の国語を教えてたでしょ。

○あ、そうなんですか、赤羽で……。

そう、そうなんですよ。赤羽の先生だったんですよ。

○で、あとテレジーナと、要するに三人とにかく確保しなければならなかったからね。ハッキリ言ってね。

私、まさか教えるとは思わなかったんですよね。

○ま、さきほど事務でもやればっていうふうにおっしゃいましたね。

そうそう、そうです。

○はじめの気持ちはそうだったんですね。

そうしたら、修練者になる志願者っていうのがいだから、そんなに大勢事務はいらないということで

○藤本さん。

藤本さん。あの人も幼稚園の先生だったんですよ

○それじゃもうね。

一年生を教えてね、学校が始まる直前になってバタバタと話が決まって……。

そういうことください……。

○一学期、四月から一年生を教えてくださいという

もちろん、シ

○シスター・テレジーナからです。

赤羽には行きませんよ。

○宗先生かどなたかが、赤羽にいらしてお話はどこから。

いただけるんですかという話をなさったようなのですが、突然、何人か先生がいらして、いつ目黒にいらしてあ、そうですか。私は行きませんね。

○シスターは、新しい学校にご自分が赴任するって話をご存知なくて、それで、黒に行くのかな」と思われたとおっしゃっていましたね。ま、とにかくこの話をいろいろ聞いていくと、話がすごく急だったんですね。あの時は……。

向こうは向こうで命令ですから、あの人たちもびっくりしてるわけですよね。

○本当に、かなり以前から意図して十分に知っていたというのは、ごく一握りの人だけなんですよね。話が急に決まったとかそんな感じみたいなんですよね。

シスター・アンジョリーナと、そのとき最初にいらしたのがシスター・アンジョリーナ校長様だってねえ。あのとき最初にいらしたのれからシスター・テレジーナとジョゼッピーナですよね。ッピーナはちょっと事務的なこともやってらしたわけですよね。

○最初は日本のお金の数え方がわからなくて、藤田先生は授業を中断してずいぶん教えに行ったっていう話をこの前うかがいましたけれど。いろんな話をうかがっているうか……。

そうそう、荒っぽいんですよ。ハハハ。

○例えばですね。鈴木先生に「星美をつくるんだけれども学校の先生になってくれないか」というわりと大雑把な話だったんですか

そうですね、なにしろ、あのコルシ神父様ですからね。

○じゃあ、例えば、今でしたら「条件がどうなの」とか細かいことがあると思うんですが。

条件なんか聞きませんよ。だから実際の話、給料が下がりましたよ。

○ワッハッハ……。そこら辺を、今、ちょっと心配したんですよ。

だから宗先生なんか、それ見ろって顔してましたよ、ハハハ。

○別に悪意はないんでしょうけれどもね。

二千円位下がりました。

○あの頃じゃ大きいですね。新しいクラスを受け持つ準備なんていうのは、春休みの時期にされたということですか。

そうですね。それこそシスター・テレジーナたちがやっていることのお手伝いみたいにやってたわけですよ。

目黒星美の校風を育てたシスター・テレジーナ

○最初の入学試験には直接的にはタッチされなかったんですか。

テストの時は、みんなが廊下で待ってましたよね。面接くらいしたんですが。

○テスト、ありましたよ。
　テストやったっけ……。
○テストは積み木を組んで形を仕上げるとか……。いわゆるメンタルテスト。あれを幼稚園の講堂の楽屋の二階、裏の方の階段をポンポンポンポンと上がっていった踊り場のところに左右にドアがあって、両方に部屋があったの覚えてます。
　僕の場合は、住所とか名前を言わされたり、パネルに絵があって、向かって左側で受けました。住所とか名前を言わされたり、パネルに絵があって、「なんですか」って聞かれて、僕、灯台がわからなかったんです。図形のバラバラにしたものを組み合わせてつくるとか。あと、向こうに何か置いてあって、「何々をもってきなさいっ」て言われて、面接のところからトコトコトコトコっと行って持って来るという、犬でもできそうなこと……。(笑)
　入学のテストをやったのはいつ頃でした？
○二月か三月でしたね。じゃあ、その頃お手伝いされていたということは、正式に移るということを前提に入学試験を手伝ってられたんですか。
　まあ、そういうことでしょうね。
○ま、冬くらいに話があって、そういう経緯をへて四月から正式に来ていただいてということですね。もう何しろね、突然なんですよ。藤田先生にしても、ある日突然現れたって感

じでね。その辺をふらふら歩き回っていらして、「あらあの人何かしら」っていうふうで。どこから入っていいのかわからないっておっしゃっていました。そういう第一印象ですからね。

ま、シスター・テレジーナだけがご存知でね。

○で、四月から始まるんですが、入学式で何か覚えていることがありますか。

入学式ね、写真で見てもわかるけど、あの小さな椅子にみんな座っていてぶん嫌がったんでしたよね。皆あの、おもしろい洋服着てね。あれで皆ずいぶんそろいましたか。

すよね。

○学校が始まるにあたって、先生方を集めて何か、教育方針の話など特にあだいぶそういう感じで、子どもたちを大事にするということで、今考えるとおかしいけれど、「お坊ちゃま」に、というふうでしたね。だから男の子のお母様方が心配してたんじゃないですか。女の子もある程度、精神的な……。リボンつけさせたり、赤羽にはない、そういうものを狙っていたんじゃないかと思います。

○これから校風をつくっていこうとなさっているんだと思いますが、基本的な考え方というのはどなたが中心になってやっていらしたんですか。シスター・テレジーナだと思いますね。もちろん、シスター・アンジョリーナも許可するぐ

らいはなさるんだけど、なんといっても推進力はあそこですよ。

○初期の星美の校風、雰囲気はシスター・テレジーナが形づくられたと……。

そうそう、そうだと思います。とにかく赤羽で年季が入っているから、五、六年生をずっと担任してらしたらしいから。

○とすると、階段は別々なんてのも、シスター・テレジーナなのかもしれないな。男の子と女の子でね。職員会議もありましたか。

もちろんありましたけれどね。

○それは毎日ですよ。何しろ皆さっと帰っちゃうんですよ。終わると、畑の中をさあっとね。毎日じゃないですか。

○先生方も……。

藤田先生なんかもう帰っちゃうんだから。

○二人しかいないんですよね。シスター以外には。

だからね、まあ朝の時に言うとか、もちろん職員朝礼っていうのがあるから。

○あ、そういうのがあったんですか。

そりゃそうですよ。そういうことは今だってあるけどね。いくら少なくたってありますよ。

○それはシスター・テレジーナが実際になさるんですか。

それは校長様ですよ、なんと言っても。

○それは毎日あるんですか。

そうです。

○あの頃学校は、何時から始まったんだっけ。八時半……。じゃあその前に十五分とか。

ええ、そうですね。

○そのときはどんなお話なんですか。

やっぱりちょっと目につく注意事項とか……。何といってもあの頃は心配事が多かったから。

「今日は自分たちは役所に行く」とか共通理解みたいなことが多かったですね。

そうですね。

○その日の行動スケジュールのような。

○朝の職員会議のメンバーとしては、どのような方が集まられたんですか。シスター・アンジョリーナとジョゼッピーナとテレジーナと藤田先生と鈴木先生と……。

そうそう。

○田中先生は。

岡工の田中先生は講師だから。

○シスター・バルバラは。

いらっしゃいました。

○六人。要するにシスター方四人と藤田先生と鈴木先生ですか。

そうです。哀れなものですよ。

○先ほど出た、階段を女子と男子に分けてというようなことですが、そうしたんですか。

やはりシスター・テレジーナがお決めになったんですか。

ああいうのはやっぱり、シスター・アンジョリーナのお考えもあったんじゃないですか。

○それで決めたことを書類に残し、今度からこうしますからというような…。

そうしましょうと。やっぱり何といってもカトリック、とにかくイタリアはそういう教育が多いんです。今まではそうだったんじゃないかな。

スタート時はサレジオ幼稚園に「おんぶに抱っこ」

○本校舎ができるまでは幼稚園の校舎を間借りしてたんですよね。ほかにもそういうようなことがあったんですか。

園のお世話になったというようなことがあったんですか。

あの、やっぱりね、お掃除なんか、掃除専門の方はいませんでしたよ、まだあそこでは。松浦さんという、この間ご主人が亡くなった方、あの人は幼稚園のおばさんをしていた。ま、こ

っちへ来てからは、ちゃんと国分さんという人が来てくれたんだけど、あの時はそういう人が
いなくて、だから、そういうのはずいぶんお世話になっていますね。
○お茶も下に取りに行ってましたよね、湯沸し室にね。まあ日常のちょっとした雑事みたいな
のを……。
そういうのはずいぶんお世話になっていた。
○運動会なんかはどうでしたか。
運動会なんかは、一緒にやりましたよ。
○実際には幼稚園におんぶして……、というような感じですね。
ちょっと出させてもらうような(笑)。
○当時、幼稚園は何クラスぐらいあったんですか。
五組ありました。それに「バラ」五組っていうのがありましたか。
と「すみれ」。
○あ、当時からもう「すみれ」はあったんですか。
「すみれ」は一組ね。
○そうすると幼稚園が八組ぐらいあるわけですから、人数的には……。
で、おばさんも大勢いましたし。だから、幼稚園のひんしゅくを買うんですよ。子どもがど

うのこうのっていう苦情がだいぶ来ましたね。

○ただ、設立の経緯としては、幼稚園につながって、幼稚園の子どもたちを受け皿というようなことだったんですね。あと、運動会のほかには遠足なんかもありましたね。とか、そういうのは、シスター・テレジーナがお決めになったんですか。

それは皆で考えるの。

○ああ、それは皆さんで。いちばん最初はどこだったんでしたっけ。村山貯水池、ユネスコ村でしたね。父兄同伴だった。母親同伴で行ったから。何か海にも行きましたよね、日帰りで。

谷津遊園へ潮干狩り。

○どうも星美の遠足は、栗拾いとか何とかって、何か獲物が……(笑)。

栗拾いはね、秋川渓谷。あと三年の時は芋掘りも。

○あの頃は今と違ってみんなどこの家も自家用車を持ってドライブに出るというような時代じゃなかったから、子どもとしてはものすごい楽しみだったんですよね。バスに乗って遠くに出かけるということのは。

Nさんのお父さんがよくついてきてくれたのよねえ。あの人、公立の先生だから、よく言ってくれたの「ここは星美では公立にない良いものを育ててくれ」って。あのお父さんのこと忘れられないわね。「ここは、絶対廊下で走らないとか、そういうことと言ったらなんだけど、そういうことをよ

くしつけて下さいね」って頼まれたけど、なかなかできなくってね。

○でも、ずいぶん強くしつけられたのは覚えてますよ。廊下で走っちゃいけない、お喋りしちゃいけない。よくシスター・テレジーナが廊下で「教室で死んだ子どもがいる！」ってね。確かにそれは、そういう意味で走っちゃいけないということね。よくおっしゃってました。

「外からきた人に挨拶をしなさい」って。シスター・テレジーナあたりは特にうるさかった。走ってるの見つかろうものなら手か何かたたかれちゃって。見張ってるんですよね、階段のところなんかでずっと。だから生徒からするとね、シスター・テレジーナに、ものすごいおばさんのイメージがあるわけです。

若かったんですよね。

○だからこの前そういう話を冗談でしたら「今のあなたたちより若かったんです」って。

事前に漏れたサレジオ村計画

○さて、一学期が終わって夏休みに入りましたよね。その時点でどんな感じをもたれましたか。

やれやれって感じですか。

やれやれって、大変だなっていう気持ちでしたよ、私なんかは。ほら、あれ「学校の予想図」

ができたでしょう。向こうの方まで中学校や何かが出ているの。私それがすごく心に残っているの。こういうふうになりますって、父兄にも見せてるわけね。ところが土地を売ってくれないんですものね。あれ売ってくれてればね……。

○あれは地主さんに計画が漏れちゃったから大変だったんですって。かなり意固地になられたみたいですね。

私、こんなのいいのかなって気持ちでしたね。

○いいのかなってのは、どういうお気持ちで？

いや、本当にそうなるのかなって。父兄からは突き上げがあったわけよ、「大丈夫なんですか」と。でも、畑の中にこの校舎が建っただけでも、私は奇跡的と思いましたね。本当にシスターのいうとおりになるんだってね。

○ま、当のシスターも半分奇跡だと思っていたりしてね。(笑)

本当に驚いた。またこっちが半分増えるなんて信じられなかったですよ。いちいちそういう疑いをもっていたわけ。

○とにかく、先生が星美で教えるようになられたときは、まだ実態がなかったわけですよね。校舎だってないし。教室もサレジオの二階の間借りですからね。C組を覚えてますよ、あの角の部屋だったのを。で、まあ、そのうち、とにかく建築が始まる。やっと少しこれで何とかな

るのかなと思われた。

何とかなるもんだと思ってびっくりしたわね。半分だけにしろ建つんだものね。そうしたら私たちは知らないけれど、ここに道路が通るとかって、実際お役所にいっていろいろしていたらしいものね。

藤田先生は貢献者！

○学校の活動が軌道に乗り始めたのはいつぐらいからですか。

結局三年目くらいじゃないですかね。私はもういなかったけどね、もう私は投げ出しちゃったから。（笑）

○一回ちょっとおやめになった。

もう私はこれはちょっと、小学校には向かないと思ったわけよ。でもね、藤田先生ってのは、そういうことは全然考えない、強気なのよ。それで、将来とかなんとかじゃない、自分の教えることだけ。だからあの人、相当貢献者だと思うよ。結果的にはどうでもね、あの人は自分のすることをしていただけなの。今でもそういうところはあるけどね。あの人は今、公立の中学校で教えていて、まあ講師だけどね。暴力学校に行っているの。教育大を出たバリバリの偉い

先生がしっぽ巻いて帰ってくるような。教えられない、手がつけられないって。

そこで藤田先生（現楚良先生）は、「私はそんなこと絶対ないよ、ちゃんと教えて帰ってくる」

○わかりますね。さもありなんと。

そういう方だから、あのときは藤田先生は宝物だったの。だって、展覧会なんかもやったんだものあの人は。

○あのレリーフ展はものすごい評判になったんですよね。小学生がこれだけのものを作るって、例の紙粘土のレリーフ、ステンドグラスみたいなのを作って文化祭か何かにずらっと出しましたね。あれ、すごい評判だったですよね。大作を作って出しましたね。

あの人はね、自分が目をかけた子がずいぶん途中で他の学校に行っちゃったりなんかしているでしょう。だけど当時は藤田先生の強気に支えられただろうねぇ。

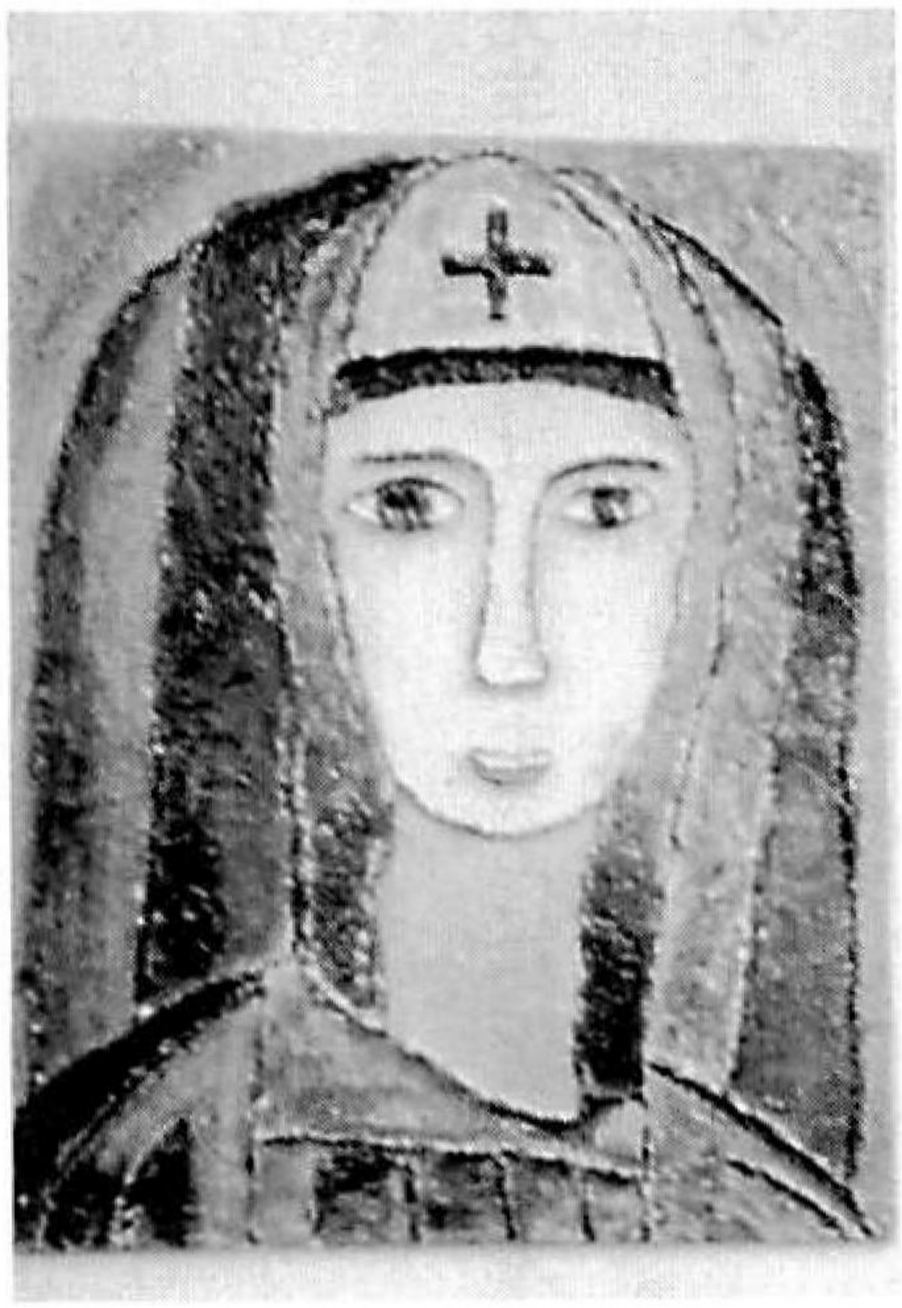
○藤田先生、あの時は、もうすでに高校で教えてらしたんですよね。

そうよ。若いけれどね。

○星美の、赤羽の高校でしょう。

国語の先生。Fさんの家なんかにも下宿してたのよね。それで家庭教師なんかもやってらし







開校３年目に実施された東横デパート（現東急）でのレリーフ展。ベニヤ板に粘土で形を作り、水彩絵の具で彩色した。すべて３年生の作品

たわね。あの人、教えることしか考えない。そういう人なのよ(笑)。学校の将来とかそういうこと何も考えない。自分は教えるだけと。だから授業が終わったらもうさーっと帰ってしまう。

○ここの校舎へ移ったのは三学期からでしたっけ。

二年の四月。

○二年から。そうすると、二年になると、また先生が三人増えたわけですよね。

応でき上がって、やっと少し形ができ上がってきたって感じですか。

とかって。

皆ここの教会の関係の人だったわね。二年生になってきたのは。東先生だとか、浦山先生だ

○その辺の採用っていうのは今度はどなたが。

それこそ、今度は校長先生とかシスター・テレジーナあたりが。

○いろいろ働きかけて。

ある日突然現れるわけ。こっちは「ああ、そうですかっ」ていうところでね(笑)。

○二期生の時はやっぱり入学試験はありましたよね。その時は入学試験には携わられたんですか。

問題を作ったりだとか。

そうですね。

○でも、お話をきいていると、最初の一年間が本当に特別な時期だったんですね。建物は間借

りだし、教職員も実際に教えているのは三人だけで、生徒数も……。

一二四人か、一二五人か知らないけれどね。

シスターの迷いのない信念に支えられ

○今度は話題がちょっと変わりますけれども、その当時、父兄とか生徒で特に印象に残っているようなエピソードってありますか。

あたしなんかの組じゃ、おばあちゃんがよくいらしてた子。あの人出ちゃったの、ちょっとショックだった。すいぶん協力的だと思っていたんですよね。おばあちゃんがすごく孫を可愛がっていたし。

○途中からいらっしゃらなくなったんですよね。三年の……。

二年生でしょう。うちの組（C組）はずいぶん抜けちゃったんですよ。そこへいくとA組はがっちりと固まっているのよね。シスター・テレジーナの力というか、精神的なものを持っているから。今でもそうですけれどね。あの方には迷いがないわけよ。

○それは子ども心にもそう思っていたけれど、今考えてみてもそういう所はなかったですね。

でしょう。いくら強気であっても藤田さんにしたって心の底ではそういうのあったと思うのね。

○関係ないんじゃないでしょうか。
　私の方は自信がないから、申し訳ないことしたっていうんで、ちょっと嫌だけどね。やっぱり学校が続いていたって感じでね。仕方がないわね。こっちはお手伝いって感じでしょうか。
○シスター・テレジーナにはこの間、当時のお年をおうかがいしようと思ったら、今の年がわかるからいやだっていう意味じゃすごい人でしたよね。二十代後半なのか、三十代前半だったのか、二十代後半ですかね。
　私、今でも夏なんかにお葉書いただいたけれども、曲がりなりにも今でも現役で校長をやっていらっしゃるわけでしょう。ご立派だと思うわね。今の先生にはもうああいう人はいないでしょう。男の先生にはちょっと干渉が多かったんじゃないかな。
○一時期、男の先生は定着しなかったですよね。星美はね、横尾先生ぐらいで。後は皆入っては辞め、入っては辞めで。
　どんな先生がいた。
○下斗米先生。
　ああ、懐かしい名前。
○松本先生は、今、大阪の城星の方ですか。

あの人なんかも気立ての良い人でしたけど、一回なんか違うところに勤めたんでしょう。

○松本先生は、シスター・テレジーナとどこかでお会いになってそれで城星にいらしたって。

あの人はすごい夢を持っていたんですよね。本が好きで好きで、それで「一カ月にいくらいくら買う」って言ってました。「そんなの全部学校に寄付しろ」って言ったんですが、寄付してくれなかったけど(笑)。だから結構本のことでは刺激を受けましたよね。若かったからね。夢があったんでしょうね。

○白井先生が、また、キビキビやってましたしね。

ま、下斗米先生ってのは、あの人はいちばん初めですよね。

○両方です。

両方だ。それから忘れられないのが小林先生。雅子先生。あの人ちょっと来てくれたでしょう。学校と幼稚園両方もってくれたわけ。それで目に疱瘡ができたりして、体がまいっちゃったの。でも私、あの人は学校のこと愛してくれてるんだと思ってるの。何ていうかね、今でもやってるのね。小さい子の。そして星美に入学を勧めてくれるの。今の校長さんなんかに言うんだけれど、「あの人は学校の恩人なんだよ」って私言うのよね。でも、先生の名簿にも、もう入ってないのよね。

○そうですね。入れなきゃいけない。
　入れなきゃいけないわよね。
○あと、体育の先生が定着しませんでしたね。もうひとつは。
　岡本先生っていうのは定着したけれど。今は城星でやっているでしょう。いまだのね。
○なぜ体育の先生が定着しなかったんですか。
　大変なんじゃないですか。時間が。
○やっぱり力トリックの学校だったから、あんまり、こう運動が盛んでないっていうか。
　道具もなかったんじゃない。
○いや、そういうんじゃなくて。体育の先生で、男の先生が本格的にやり始めるというのがなかったでしょう。だいたい女性が多かったし。制約も多かったしね、やっちゃいけないことしね。
　女性の場合は結婚で辞める人が多いし。男性の教師が定着するには勤務条件、その他で最初の頃の星美っていうのはやっぱりあんまり条件もよくなかったんですか。
　昔はものすごい低かったんです。給料が。
○今は逆に、非常に良いそうですけれども(笑)。
　そこは知りませんけれども、一般に比べたらどうかわからないけれどね。公立なみではある

と思うんだけれどもね。

○一般の私立よりは良いという話を聞くんですが……。

それはどうかわからない。いつまでもいい、かと思うけれどね。

○その当時の在校生ってのは、だいたいこの近辺だったですよね。まあ、一部から通ってたとか。クラスにる生徒もいましたけど。

でも今みたいにね。

○S君が、大倉山二、三人ぐらいじゃなかったでしょ。

それが普通でしたよ。

○だいたい、原町とか、月光町とか

何といってもサレジオの園児が多かったからね。

○先生は都立大から歩いてこられてましたね。

私は、宗先生もいるし、道は石ころだらけ、ごろごろ道でしたけれどね。そこを通ってね。

○一緒に通いましたよね。畑の時代に。

ええ。歩道橋なんかないからね。宗先生はね、奥沢の方まで歩いて行ったんですか。

○へえ、歩いていったんですか。

そのほうがまっすぐ行くと楽なんです。あそこから一度下りて、一度川のところを下りてまたにがっていく。

○じゃあ宗先生は奥沢まで歩いて……。

だって、バスなんかなかったですもんね。

○そうですね、途中からですもんね。この辺は春になればいっぱい菜の花が咲いて、モンシロチョウのものすごい数が飛んで。屋上に上がれば富士山がもうよーく見えましたね。ここからずっと畑でね。そして、臭い溜まり場もあったりしましたね。

あそこで何せ大根を洗ってたんだから。幼稚園のちょっと行ったところに、桟橋じゃないけれど、下りる台があって、そこで洗ってましたよね。

そういうのよく覚えてるのね。

○いやぁ、その辺はよく覚えてるんですよ。こも今、暗渠になって、上は歩道になっちゃってますけれど、通用門のところに細い小川があって、橋がかかってたでしょう。

落ちた子がいるんじゃないの。

○細いコンクリートの桟を渡してあったでしょう。あれを遊びで渡るんです。

だったんですよね。

それで、向こうに会社なんかなかったから、グランドもずーっと広くてね。校庭の塀は生垣

○僕の記憶では昼休みなんかにサレジオのグランドへ行って遊んでいました。

そうですよ。回るブランコがあってね。

○昼休みと放課後、野球やってた、野球しかやりませんでしたよ。あそこにふたつネットがあって、贅沢に遊んでましたね、あの頃だから、ここのグランドって有名でしたよね。

そうですよ。それでね、ここの幼稚園の講堂はしょっちゅう碑（いしぶみ）小学校に貸してたんですよ。碑もね、音楽会っていうと、ここへ来るんです。そうするとね、石松先生は碑小学校でしょう。それで小野先生も碑にいたんだけれどもね、あの先生は短期間でしたね。すぐ病気になっちゃって。それで保養して、こっち（星美）へ来たんですけれどね。石松先生なんかはここで音楽会したの覚えてるんですって。

○それで、あれですか、音楽はシスター・バルバラとダルフィオル神父様。ダルフィオル神父様が音楽を教えるというのは星美側からお願いしたんですか。それとも神父様から積極的に。

両方からじゃないですか。思いが一致したんじゃないですか。

○あの音楽はすごい。一生懸命やったのでよく覚えてます。

「サンタルチア」を。

○「サンタルチア」とか「小鹿のバンビ」とか。あれは貴重ですよ。あのベルカント唱法を、辞書で知るとかっていうのではなくて自分たちが体験したという。とにかくあの頃はものすご

く、教会と密着していましたよね。

日曜学校っていうとすごかったですね。子どもが溢れていましたよ。

○聖歌隊がありましたね。クリスマスなんか、星美の生徒が、今でもまた最近やるようになってましたけど、当時は深夜ミサに出てやってたんですよね。三年ぐらいから。逆に五年ぐらいからは、僕らは声代わりであまり出てないから。四、五年ぐらいのときに一番盛んだったんだよね。大人たちもいましたね。ヴァイオリンの江藤俊哉がきて演奏したとかね。

よく音楽会をやったんですよね。二期会の人が来て、ダルフィオル神父様の教え子もいて。それで、ここへ呼んで。チャリティ音楽会か何かをしていましたね。

○時々、授業の合間に講堂で、ダルフィオル神父様にミッキーマウスの映画、見せてもらった記憶があります。どういうことで、ああゆうことをやるようになったんですか。

あれはね、日曜学校の子どもに見せるわけですよ。で、ほら、カタカタカタって、何か鳴り物入りでね、神父様自身の。あれを子どもたちは喜んでるんですよね。あれが楽しみで、子どもたちは日曜学校に来たんじゃないかしら。それをあなたたちにも見せたわけです。ちょっと何かというと、じゃあ、あれを見せようっていうことで。

○それはもう、普通の授業をつぶしちゃって、そういう話になるわけですか。

私は休み時間なんかによくやってたなっていう記憶がある。

○昼休みですね。
　そうそう、休み時間よね。
○雨が降ってどうしようっていう体操の時間なんかにもやってくださいましたね。
　そういう意味では神父様とっても優しいのよ。子どもたちのことを思ってね。
にはもう、いとわないのよね。
○あのミッキーマウスを見た世代は絶対忘れないんですよ。本当はあれ、ミッキーマウスじゃなくて、マイティマウスかな。当時はああいうの、見ようと思っても、見れませんでしたよね。
あと、一部マンガじゃないのがあったでしょう。あの、ベッドが動き出すっていうの。アメリカザリガニを追っかけていくの。あの、寝る前にね、冷蔵庫を開けて食べるとそれがもたれて悪い夢を見るという。一種の教育映画なんですけれどね。その悪い夢というのが、ザリガニに追いかけられてベッドごと逃げるという。よく覚えてるもんだなぁ、あんなのね。
　合いの手が上手いのよねえ、あの神父様のね。
○飛行機の音とかね。あれは何年生ぐらいまでやったんでしょうね。二期生は当然あるよね、三期生もあるし、七期生あたりはないみたいですね。
　藤田さんの息子なんかは、幼稚園だけだけど、もう忘れられないって。
○星美の草創期って、いろいろな意味でダルフィオル神父様を抜きにしては語れないんですよね。

だから、あの神父様は離れられないのね。もちろん幼稚園もそうだけど。

○全部、ここを、星美を含めてつくり上げたっていうことですよね。

足さえ悪くなきゃ、今だっていらっしゃるつもりじゃない。すぐ歌いたがるものね、「サンタルチア」くらい。

シスター方は学芸大学の借家から出勤されていたよね。

○当時の話に戻りますと、シスター・テレジーとか、四人のシスター方が学芸大学の方に家を借りてそこから通学……通勤されていたと、その頃のことで何かエピソードはございませんでしょうか。

そうですね。

○お昼は帰ってきましたよね。

ええ、いちいち行ったり来たりしてましたよねぇ。

○雨の日でもねえ。シスター・ジョゼッピーナとかはお弁当持ってらしたってお聞きしてましたけれど。

あ、そうだったかな。何しろ、昼間はそういえば帰らなかったかもしれませんね。

○お昼一緒にいたことないからわからなかったけどね。いつもお昼の時間はお弁当で。

まあ、私たちは子どもたちと一緒にいたしねぇ。

○A組ってのは、お昼一緒に食べないんです。

今でこそ、システムは一緒に食べてるわよ。

○BとCは一緒だったけど、A組は代わりの先生がきたんです。志願者とかなんとか。替わりの普通の先生が。

藤本さんみたいな。

○いっつもいなくなってました。

もう、本校舎へ来てからはちゃんと修道院に食堂ができたから良いけどね。いい匂いがしてましたけどね(笑)。

○サンマの匂いがしてましたけどね(笑)。

そうですか、コーヒーの匂いなんかよくしてましたね(笑)。

○ところで、三谷町の家に先生たちがいらっしゃったときに、宮さまがいらしたとかって本当ですか。

宮さまがいらしたわね、なんか。

○どなたが見えたんですか。天皇陛下のなんかの弟さんとかって。

そういう関係の子どもが二期生にいなかった？　なんかいたような。

○先生方がいらして、お部屋がふたつしかないから、階段の下のお布団を入れるところに藤田先生様がいらしていると きにお見えになってね。で、隠れるところがないから、階段の下のお布団を入れるところに藤田先生と鈴木先生と、シスター・ジョゼッピーナと三人で二〇分ぐらい息をこらしてたって……。

そんなの覚えてない（笑）。

○そういう話、ほかにもあります。オーバー生地を洋服屋さんが持ってきて二階に持ち込んでくれたのはいいんだけれど、そのまま帰っちゃって、今度は下ろすに下ろせなくて、重いから階段の上から滑らせたら、勢いがついていてシスター・ジョゼッピーナが日本の家は弱いのねって言ったとかって。イタリアの石の家は反対側のトイレの壁をぶち破ってしまったとか。覚でダーっとやるから、洋服生地だからと思って滑らせたらしいんですよ、勢いよく。そうしたら借家の大家さんが……、シスターだから大事にすると思ってたのにって。

お米屋さんだっけ。

○お米屋さんの裏でした。

はじめはね、もうちょっと手前の家を見にいったんですよ。一緒に行ったの。

○どなたが探したんですか。

あの家は知らないけれど、その前の家は一緒に見に行った。シスターたちの。それで何か、

ちょっとお店みたいな感じで道に面していたの。今、あるかどうか忘れたけれど。たたきが非常に大きかったんですよね。でも、ちょっと何か気にいらなくてね。やっぱり、あそこは奥に入ってるからよかったんじゃない。

○シスター・テレジーナですか。一緒に見にいらしたのは。

そうです、そうです。

○シスターは、神父様があそこの三谷町の家を見つけてくださったっておっしゃるんですね。でも神父様は知らない、シスターのどなたかが見つけたんでしょうって。

だから、その家が気にいらないで、また移ったことは確かなの。誰かからお話があったんじゃないかな。

○何か四畳半が四つという、奇妙な家なんですよ。それは、シスター・テレジーナに聞いたんですけれど、四畳半が四つという、考えてみたらそんな家ってあるのかなあと思うんですけど。

とにかく一期生はよく働いた

○先生は当時も教えてらしたし、今も子どもたちの面倒を見ておられるんですけれど、あの頃の生徒の気質と、今と比べてどうですか。だいぶ違いますか。

今は、何かたくましいんじゃないかと思うね。

ちゃまだったからね。でも、男の子はそうでもなかったね。元気だったね。

○当時の方が全般におとなしい感じでした？

おとなしい感じでしたねえ。それによく働いていうときに、本当によく働いた。

○扱いやすいかったですか。

申し訳ない、あたしなんかがするほうじゃなけれど。だって、新校舎が出来て引っ越すとき、みんな机を運んだもんね。そして何かって、上級生だからしょうがないというと、よく働いていたわよ。二年生なのに上級生だっていうんで、上級生だからしょうがないとかって。

○一年生のときは半分幼稚園児みたいですし、二年、三年ぐらいになると、とにかく下は一年かいなくても最上級生なんですよね。だから、何かっていうとあなたたちがやりなさい、みたいな感じで。今だったら五、六年生がやるようなことをやらたことは確かですね。

よく怪我もしないでね。

○運動会のお手伝いもさせられました。

運動会は三年から独立したでしょう。

○三年の時からはグランドは借りるけれども、幼稚園とは別にやるようになりましたね。

そうすると、みんなが大変だったの。

○そして、幼稚園との間の道はまだ砂利道でしたね。今、信徒会館になっている門から出てすぐだったけど。司祭館がありましたね。だいぶん動かしたわよね。よくあのほろがもってるね。

あの司祭館、ずいぶん

○あれ、もう今年で終わりですって。当時、建築材料がない頃だから、いい材料を使ってはいないと思います。総ヒノキか何か使ったらもっともつんですけど。教会の裏でね。その隣に正門があって、ずっと並んでました。

だったんですよね。司祭館がちょうどこの正面左側に講堂があって、ずっと並んでたんだわ。

講堂が動いちゃったんだわ。

○動いて建て替わって、あれでずいぶん変わったんですね。あの講堂はね、思い出がずいぶんあったけど。幼稚園なり小学校なり、小さいときにね、子どもの頃からみたら土地だってものすごく広大なわけだし、建物は大きいしね。

この教会ができたときはみんな知ってるでしょう。落成したときは。覚えてない？

○知ってます。落成したのは知ってますね。

建ったのは覚えてるでしょう。ステンドグラスがイタリアから運ばれて、ばれてきたけど壊れているのもあって。鐘がなかなか来なかったんでしたね。

○鐘がなかなか来なかったのは覚えてます。あのみんなちっとも変わらないね。年の開きなんてわからない。

○先生だって変わり走りませんよ。

一九なんていったらずいぶん開きあるのにねでしょう。早い人はもう子どもいるでしょう。

○女の人で高校出てすぐ結婚でもすれば一九でうちの学校も、もう二世が卒業しちゃってるんだもんね。

○今度は三世が入ってきますね。こうして、よき伝統が引き継がれると素晴らしいことですね。

目黒星美学園小学校草創期の貴重なお話ありがとうございました。

一九八七年九月五日　目黒星美学園小学校
インタビュアー　樋泉史彦、駒野かほる、斎藤雅子